

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第102集

# 宮 林 遺 跡

— 第4次調査 —

---

2008.3

深谷市教育委員会

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第102集

---

# 宮 林 遺 跡

— 第4次調査 —

---

2008.3

深谷市教育委員会

## 序

埼玉県北部に位置する深谷市は、平成18年1月に深谷市・岡部町・川本町・花園町との合併により新たなスタートを迎えることとなりました。深谷市は、北部に利根川、南部に荒川が流れ、変化に富んだ地形や豊富な農産物があり自然の恵み豊かな土地柄を有しています。

ここには、先人たちの残した足跡が、埋蔵文化財として今なお多く眠っております。なかでも、縄文時代草創期や古墳時代前期を中心とする集落跡や遺物群を出土したことで知られる宮林遺跡は、深谷市の原始・古代を考える上で欠かすことのできない遺跡のひとつです。

深谷市では、このような貴重な遺跡群を保護するために鋭意努力し、やむなく破壊を免れない場合は、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成18～19年度に民間会社の受託事業として、実施した宮林遺跡4次調査の成果をまとめたものです。発掘調査では、竪穴住居跡2軒や焼土跡、集石、土坑等が検出されました。特に、10号住居跡より出土した古式土師器は、当地域における基準資料とすることができます。

本書が学術・教育関係はもとより、文化財に対する保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成20年3月

深谷市教育委員会  
教育長 猪野幸男

## 例 言

1. 本書は、宮林遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。なお、発掘調査個所の地番は深谷市永田479番地外である。
2. 発掘調査は、工場建設に伴う事前の記録保存のための発掘調査で深谷市教育委員会が主体となり事業者である東正工業株式会社の委託を受けて埋蔵文化財受託事業として行った。
3. 発掘調査期間は、平成19年3月19日～5月11日である。
4. 発掘調査及び出土遺物の整理は森下昌市郎が行った。
5. 遺跡の基準点測量及び全測図の作成、遺物実測図の作成については株式会社東京航業研究所に委託した。
6. 出土遺物その他資料については、深谷市教育委員会が保管している。
7. 本書の刊行に関わる組織は、以下のとおりである。

(事務局)

深谷市教育委員会教育長	猪野 幸男	主 任	知久 裕昭
教育次長	石田 文雄	主 事	幾島 審
次 長	中村 信雄	臨時職員	栗原貴世美
生涯学習課長	澤出 晃越	(整理作業)	
主 幹	武井 茂	臨時職員	大木 良子
文化財保護係長	古池 晋禄		市川喜和子
主 査	森下昌市郎		笠原 淑江
＊	鳥羽 政之		吉野みゆき
＊	高村 敏則		

8. 発掘調査及び出土品整理、報告書の作成にあたっては、次の方々から数々のご指導ご助言を賜った。

東正工業株式会社 細田久二 野辺徳治 株式会社藤崎總兵衛商店 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

(敬称略)



# 目次

序

例言

目次

## I 発掘調査の経緯及び経過

1. 発掘調査の経緯……………1

2. 発掘調査・整理報告の経緯……………1

## II 遺跡の地理・歴史的環境

1. 地理的環境……………4

2. 歴史的環境……………4

## III 発見された遺構と遺物

1. 調査の概要……………10

2. 発見された遺構と遺物……………10

IV まとめ……………31

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図宮林遺跡全測図……………	2	第12図第10号住居跡出土土器(1) ……	15
第2図宮林遺跡第4次調査全測図……………	3	第13図第10号住居跡出土土器(2) ……	16
第3図縄文時代草創期の主要遺跡分布……………	7	第14図第11号住居跡……………	16
第4図縄文時代早期の主要遺跡分布……………	7	第15図焼土跡・集石・土坑……………	19
第5図縄文時代前・中期の主要遺跡分布……………	8	第16図グリッド出土土器(1) ……	20
第6図縄文時代後・晩期の主要遺跡分布……………	8	第17図グリッド出土土器(2) ……	21
第7図古墳時代前期の主要遺跡分布(集落) ……	9	第18図グリッド出土土器(3) ……	22
第8図古墳時代前期の主要遺跡分布(墳墓) ……	9	第19図石器実測図(1) ……	25
第9図宮林遺跡1～4次調査遺構配置図……………	11	第20図石器実測図(2) ……	26
第10図第10号住居跡……………	13	第21図石器実測図(3) ……	27
第11図第10号住居跡遺物分布図……………	14	第22図石器実測図(4) ……	28

## 表 目 次

第1表 第10号住居跡出土土器観察表……………	17
第2表 グリッド出土土器観察表(1) ……	23
第3表 グリッド出土土器観察表(2) ……	24
第4表 出土石器観察表(1) ……	29
第5表 出土石器観察表(2) ……	30
第6表 住居跡規模一覧 ……	31

## 図 版 目 次

図版1 第10号住居跡(遺物検出状況東から、南から)	
図版2 第10号住居跡出土遺物(床面遺物出土状況1～6)	
図版3 第11号住居跡(確認状況、完掘状況)	
図版4 調査区の状況(調査区近景、土層断面状況、トレンチ調査状況、埋め戻し状況)	
図版5 土坑・焼土跡(1～3号土坑完掘状況、1・2号焼土跡確認状況、遺構確認状況)	
図版6 集石(1・2号集石、確認状況、断面状況、底面状況、完掘状況)	
図版7 集石(2号集石、底面状況、完掘状況、集石調査状況)	
図版8 第10号住居跡出土遺物	
図版9 グリッド出土遺物(1)	
図版10 グリッド出土遺物(2)	
図版11 グリッド出土遺物(3)	

## I 発掘調査の経緯及び経過

### 1. 発掘調査の経緯

宮林遺跡は、埼玉県遺跡登録番号№66-046にあたる。遺跡は、関越自動車道花園インターチェンジの北東約1.7kmにあり、遺跡東端を国道140号線バイパスが縦断する。遺跡の範囲は南北約180m、東西約650mであり、東西に長い楕円の形状をとる（第1図）。発掘調査は、過去3次にわたり実施されており、本報告分は4次調査にあたる（第2図）。

第1次調査は、国道140号バイパスの建設に先立つものである。調査は、昭和58年1月～8月にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査面積は6,240㎡である。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡6軒、古墳時代のもの1軒、集石、土坑等である。このうち4号住居跡から、縄文時代草創期に属する土器群（爪形文、多縄文系）が豊富に出土し、全国的にも希少な類例として注目を浴びている（宮井他1985）。第2次調査は、平成13年10月～12月にかけて実施されている。第1次調査区の西側に隣接し、発掘調査面積は2,536㎡を測る。調査は、倉庫建設に先立ち花園町遺跡調査会（当時）が実施した。検出された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡7軒、土坑10基等である。第3次調査は、平成15年4月～5月にかけて実施された。調査原因者及び主体者は、第2次調査と同じであり、倉庫に伴う駐車場造成に係る発掘調査である。発掘調査面積は220㎡であり、検出された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、土坑3基等である。

今回報告する発掘調査は、平成18年1月の1市3町の合併後、初めてのものである。合併協議の過程で、民間事業者による開発が原因となる発掘調査は、花園町遺跡調査会が実施していたが、平成17年12月をもち解散し、その後は、（新）深谷市の受託事業として実施する方針となった。発掘調査地点の地番は、深谷市永田字宮林479番地1～3であり第2、3次調査区の北側に隣接する。発掘調査原因は、工場建設に伴うものであり、事業者である東正工業株式会社（以下事業者と記す）からは、平成19年1月19日付けで工事予定地内の埋蔵文化財に関する協議書が提出された。これに対し深谷市教育委員会（以下教委と記す）では、工事予定地は、№66-046遺跡（宮林遺跡）地内

であり、埋蔵文化財確認調査の必要があることを回答した。その後、教委による確認調査が、平成19年2月5日に実施され、古墳時代前期の竪穴住居跡等が検出された。この結果を踏まえ事業者、教委との協議の結果、事業実施は、避けられないとの結論に至り、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。文化財保護法第93条の規定に基づく事業者からの届出及び同法第99条に基づく教委による発掘調査の届出は、平成19年3月15日付で埼玉県教育委員会に提出し、実際の発掘調査は平成19年3月19日～5月11日にかけて実施した。

### 2. 発掘調査・整理報告の経緯

#### (1) 発掘調査

発掘調査は、平成19年3月19日から着手した。作業は、まずバックホー0.4による表土除去から始めた。表土層は約40cm程であり、この表土を除去すると遺構確認面である黄褐色ローム層（樹換面）上面となる。表土除去終了後、遺構確認作業を実施した。遺構確認については表土除去と併行して実施し、比較的容易に竪穴住居跡2軒、土坑、集石等が検出された。遺構確認終了後、掘り下げを開始した。掘り下げの途中で、出土状況図、土層断面図等の作成及びこれらの写真撮影を行った。その後、遺構完掘状況の写真、図化を行い、平成19年3月30日をもって平成18年度の作業工程が終了した。その後作業は一時中断したが、平成19年5月初旬に、古墳時代前期及び縄文時代の遺構の下層に存在すると推定される旧石器時代の遺構・遺物の確認調査を行った。この結果、遺構・遺物が存在しないことが判明し、作業の全工程が終了した。なお、基準点・水準点測量、遺構図の作成等の作業は、（株）東京航業研究所に委託した。

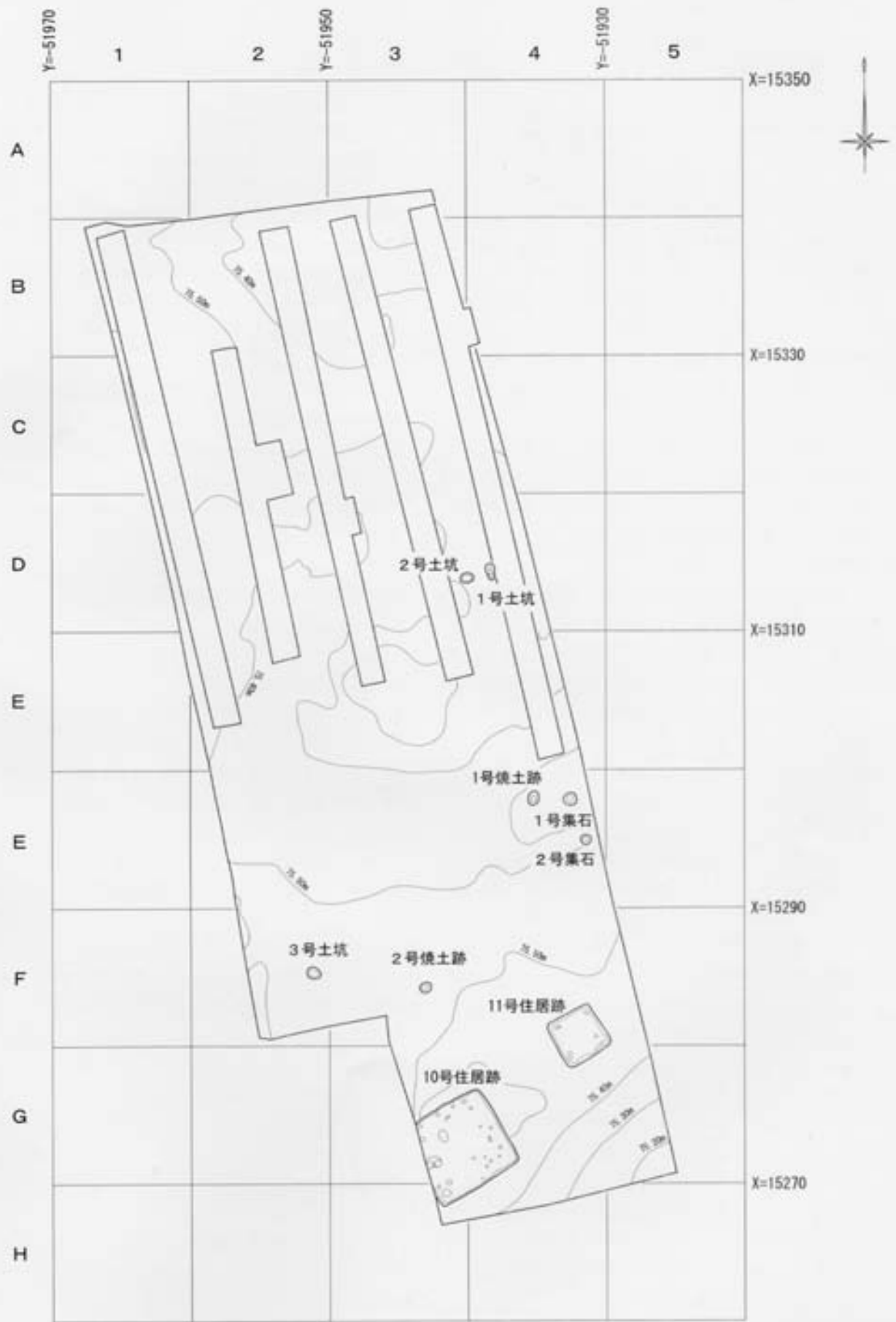
#### (2) 整理作業

整理作業は、平成19年4月～20年3月にかけて実施した。水洗・注記・接合等の作業終了後、出土遺物の実測図作成・トレース・写真撮影については（株）東京航業研究所に委託した。報告書の編集・原稿執筆作業については、川本出土文化財管理センターにおいて実施し、発掘調査報告書の発行は、平成20年3月31日である。



第1図 宮林遺跡全測図





第2図 宮林遺跡4次調査全測図

## II 遺跡の地理・歴史的環境

### 1. 地理的環境

荒川以北の深谷市域は、地形的には櫛挽台地、本庄台地、妻沼低地に大きく区分される。

櫛挽台地は、荒川左岸に広がる台地であり、荒川により形成された扇状地地形を有する。西部は、藤治川・針ヶ谷堀周辺で本庄台地、山崎山丘陵と区分され、北端部は、福川左岸付近で妻沼低地と接する。妻沼低地と櫛挽台地の境界付近を東流する福川は、櫛挽台地扇端部の豊富な湧水を集めながら、深谷市北部域の農業用水として現在も重要な位置を占めている。

櫛挽台地の標高は、扇頂部にあたる寄居付近で100m程、扇端部は35～50m程である。また、当台地は荒川の流路変更により形成された段丘が発達し、その形成過程により櫛挽面、寄居面に大別される。

櫛挽面は武蔵野面に対比され、岡部町、深谷市東半をのせる。台地上には、藤治川、針ヶ谷堀川、西川、上唐沢川、押切川、下唐沢川等の中小河川が北流する。これらの河川は、扇中部から扇端部付近の湧水に端を発し、台地を北流する。一見平坦に見える台地上も、現存する中小河川や、その他の埋没谷による緩やかな起伏がある。宮林遺跡は、この櫛挽面の末端に位置し、遺跡の眼下は一段低い寄居面となっている。

寄居面は、櫛挽面以降に形成された段丘面である。櫛挽面とは、寄居高校付近から深谷市下郷、境、折之口、上宿へと連なる崖線で区分される。

この寄居面では、ローム層が比較的厚く堆積する段丘面と、その下位にありローム層の堆積が薄いか認められない段丘面とに区分される。前者は、御成稜ヶ原面として別称される。境界の崖線付近では湧水が随所に認められる。さらに、寄居面形成以降、川本明戸付近を扇頂とする荒川新扇状地が形成される。御成稜ヶ原面との境界付近及び扇端部付近は、熊谷市域の重要遺跡が集中する。

本庄台地に相当する地域は、深谷市西端の藤治川・針ヶ谷堀以西の地域（旧岡部町榛沢地区）である。台地上には、見馴川（小山川）・志戸川、女堀等の中小河川が北流しており、この河川の流域は、沖積地が形成されている。

妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された広大な低地帯である。南方で本庄台地及び櫛

挽台地と接する。旧岡部町北部、旧深谷市北部が該当し、低地内では、中洲的に微高地が形成され、この微高地上に遺跡が集中する。

この他、櫛挽台地と本庄台地の境界付近に山崎山（標高約117m）・諏訪山丘陵（標高約109m）、櫛挽面に仙元山丘陵（標高約98m）と呼称される残丘性の小丘陵が存在する。

一方、荒川以南は、旧川本町域南部が該当する。当地域の南半は、江南台地上にのる。江南台地も荒川の流路変更により形成された段丘面であり、扇状地地形を有する。

扇頂部付近の寄居町木持では標高140m、扇端部の熊谷市原新田付近では標高45mを測る。この段丘面は、江南面と呼称され、櫛挽面以前に形成されたものである。江南面の下段には寄居面が存在する。この段丘面は、櫛挽台地側のそれと対応する。

江南台地上から下段の段丘面（寄居面）にかけて、荒川の支流である吉野川が東流及び北流し、その流域には狭小であるが沖積低地が形成されている。

（引用・参考文献）

- 籠瀬良明1975「自然堤防」古今書院
- 川本町 1991「川本町史—通史編」
- 埼玉県 1978「埼玉県市町村誌第14巻—岡部町」
- 埼玉県 1986「埼玉県史別編3—自然」
- 深谷市 1969「深谷市史」
- ＊ 1980「深谷市史—追補編」
- 寄居町 1986「寄居町史—通史編」

### 2. 歴史的環境

本項では、宮林遺跡1～4次調査で検出された遺構・遺物の主要時期である縄文時代及び古墳時代前期の遺跡を中心に、その前後の時期を記述することとする。

#### （1）縄文時代の遺跡動向

深谷市域においては、旧石器時代から縄文時代に至ると発見された遺跡数は増加する。立地条件、遺跡群のまとまりを考慮し、深谷市域及びその周辺をA～Hに区分した。

縄文時代草創期の遺跡は、A～F地域に小規模ながら散在している（第3図）。A地域は、本庄台地東端部に位置し、見馴川（小山川）、志戸川合流域にあたる。石葺A遺跡で神子柴型石器が、東光寺裏遺跡で微隆起線文土器が出土した。また、

水窪遺跡でも有舌尖頭器が1点出土している。B地域は、櫛挽台地西端に位置し藤治川・針ヶ谷川流域にあたる。当地域の草創期遺跡群は、豊富な内容を有する。西龍ヶ谷遺跡、西谷遺跡、水久保遺跡、沼端遺跡は、多縄文、爪形文土器を有する遺跡である。C地域は、松久丘陵北縁～諏訪山にかけての地域である。北坂遺跡では微隆起線文、多縄文土器が、如来堂B遺跡では爪形文、燃糸匠痕土器が出土した。以上A～C地域は、距離的にも近接しており、県下有数の草創期遺跡の集中地帯である。今後は、当該期の遺構の検出が期待される。D地域は、櫛挽台地北縁～妻沼低地にかけての地域であるが、東方城遺跡で有舌尖頭器が出土している。E地域は、櫛挽台地南東縁の地域である。本報告の対象となる宮林遺跡、沢口遺跡で多縄文土器、爪形文を伴う住居跡や爪形文を伴う土坑が、それぞれ検出されている。また荒川右岸の江南台地上であるF地域では土器は検出されていないが上本田地区で有舌尖頭器が、四反歩南遺跡で矢柄研磨器が出土している。

縄文時代早期では、B地域において西龍ヶ谷、西谷、水久保、沼端遺跡が前時代から継続する。また、新たに茶白山、中原、北東原遺跡が新規に加わり、遺跡は、増加傾向となる。C・E地域は大きな変化は見られず、A・D地域は早期段階の遺跡は調査されていない。当該期の大きな変化としてF地域での遺跡調査例が増加する。重要な遺跡として燃糸文期の竪穴住居跡が検出された四反歩南遺跡、萩山遺跡等があげられる。また百済木遺跡、白草遺跡では早期後半段階の炉穴跡が検出されている。舟山遺跡では早期終末の東海系土器群が出土している。

縄文前・中期は、深谷市域及び隣接地域における遺跡形成のピークにあたる。前期以降、明確な集落跡として認識できる遺跡が各小地域に確認できる。前期段階では、A地域の宮西遺跡、四十坂遺跡で関山式後半の集落跡が検出されている。荒川右岸のG地域では、むじな塚、南大塚遺跡等、黒浜期にピークを迎える集落跡が検出されている。諸磯期では、A・H地域において東光寺裏遺跡・台耕地・塚屋・北塚屋遺跡等の集落跡が検出されている。

中期段階では、J地域に集落の進出傾向が顕著となる。小台、出口、島の上、壹場松原遺跡等が代表的なものである。これらの遺跡群は、加曾利

E式段階に盛行する。

縄文時代後・晩期では、D地域における集落跡の検出例が増加する。大きな画期となるのは、称名寺～堀之内期にかけてである。当地域の重要な遺跡として明戸東遺跡、新屋敷東遺跡、上敷免遺跡等がある。その他の地域では、遺跡数は減少傾向にある。荒川右岸のF・G地域では、その傾向は顕著である。この中で、東谷遺跡(B地域)、原ヶ谷戸遺跡(I地域)、橋屋・樋ノ下遺跡(H地域)などは、希少な集落遺跡であり、当該期の拠点集落と言う事が可能である。

以上、深谷市及びその周辺地域の縄文時代の遺跡動向の特徴を要約すると①～③のとおりとなる。

- ① 縄文時代草創期は、集落跡の確認は希少であるが、A～F地域に点的に確認されており、県下有数の遺跡数を誇る。早期段階でも、この傾向が継続しているがA・D地域で、遺跡が欠落し、逆にB、F地域では遺跡数が増加する。
- ② 縄文時代前～中期では、遺跡数がさらに増加し、集落跡の調査例が増加する。中期後半段階にはJ地域に集落の進出傾向が顕著となる。
- ③ 縄文時代後・晩期では、D地域において当該期の集落跡、遺跡が増加する。特に称名寺～堀之内期にかけての遺跡が集中する傾向にある。その他の地域では、遺跡数が減少するが東谷、原ヶ谷戸、橋屋・樋の下遺跡等に拠点集落が形成される。

#### (2) 古墳時代前期の遺跡動向

深谷市域における古墳時代前期の遺跡は、大きく区分すると、深谷市西部の本庄台地側(針ヶ谷堀以西・I地域)、妻沼低地～櫛挽台地末端(小山川・福川流域・II地域)、櫛挽台地南縁(荒川左岸域・III地域)、江南台地上(荒川右岸域・IV地域)、山崎山丘陵上(V地域)に遺跡の分布が認められる。

I地域の遺跡としては、石蒔B遺跡、六反田遺跡、大寄遺跡、西浦北遺跡、宮西遺跡、地神祇B遺跡、水窪遺跡等が該当する。本地域は、隣接する北武蔵地域において当該期の遺跡が密集する古代児玉郡城と地形的隔たりがなく、関係が深い地域と把握することができる。

この点を象徴する遺構として石蒔B遺跡で検出された前方後方形周溝墓がある。近隣では、南志

渡川遺跡、村後遺跡、塚本山古墳群において検出されており、石葺B遺跡例を除くと、すべて児玉地域に集中しており、現状では見馴川（小山川）中流域及び志渡川流域に採用されることの多い墓制である。また、石葺A遺跡では、遺跡内に古墳時代前期から中期にかけて掘削されたと想定される灌漑のための大溝が検出されている。さらに地神祇A遺跡1号溝は、小規模であるが、山陰地方に系譜を有す鼓形器台をはじめとする土器群が出土しており、これらの事例から、当地域の開発が古墳時代前期から中期にかけて進行したことが判明している。

Ⅱ地域の遺跡としては矢島南遺跡、起会遺跡、戸森松原遺跡、戸森前遺跡、深谷町遺跡、下手計西浦遺跡、清水上遺跡、明戸東遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、上敷免遺跡、東川端遺跡等が存在する。これらの遺跡群は、前者に比較すると総じて小規模で点的な印象を受け、小山川（身馴川）中流域（Ⅰ地域）との差は顕著である。当地域は、古墳時代中期末～後期初頭にかけて遺跡の増加が顕著であり、隣接するⅠ地域に比較すると、地域の開発がやや遅れるという印象を受ける。上敷免遺跡、東川端遺跡からは方形周溝墓が検出されている。

Ⅲ地域の遺跡では、台耕地遺跡、宮林遺跡が代表例である。宮林遺跡では、本報告例を含め、当該期の集落が約10軒、台耕地遺跡でも10軒が検出されている。

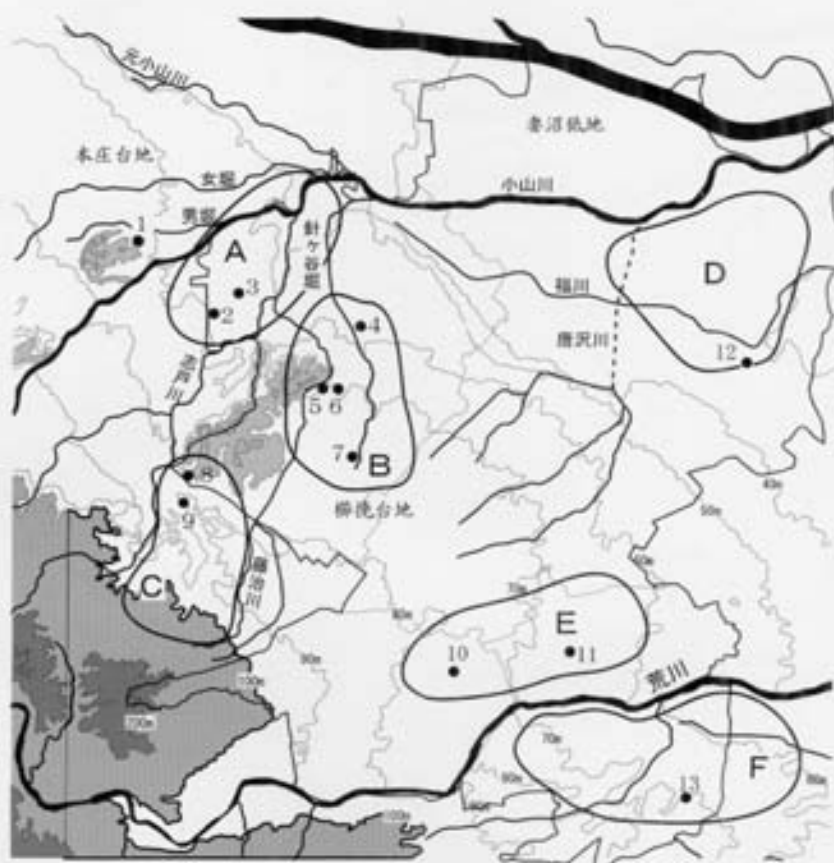
これらの集落跡は、当該期の遺跡が希少な地域において破格であり、特異な印象を受ける。荒川左岸の拠点遺跡として、今後注目されるべきである。前後の時期に連続する集落が存在しないことも、この点を裏づけるものであろう。

Ⅳ地域では、白草遺跡、円阿弥遺跡がある。両遺跡ともに弥生時代後期から連続する遺跡であり、荒川左岸地域とは好対照であり、その成立の背景についても異なるものと推定される。

Ⅴ地域では、山崎山丘陵上に玄番谷遺跡が存在する。当遺跡からは2軒の竪穴住居跡が検出されており、東海、近江地方の影響を受けた土器群があり、五領期の中でも古い要素を有し、当地域の古墳時代前期の開始を考える上で重要な遺跡と言う事ができる。遺跡の立地から、藤治川流域の開発に関わる遺跡と考えられる。

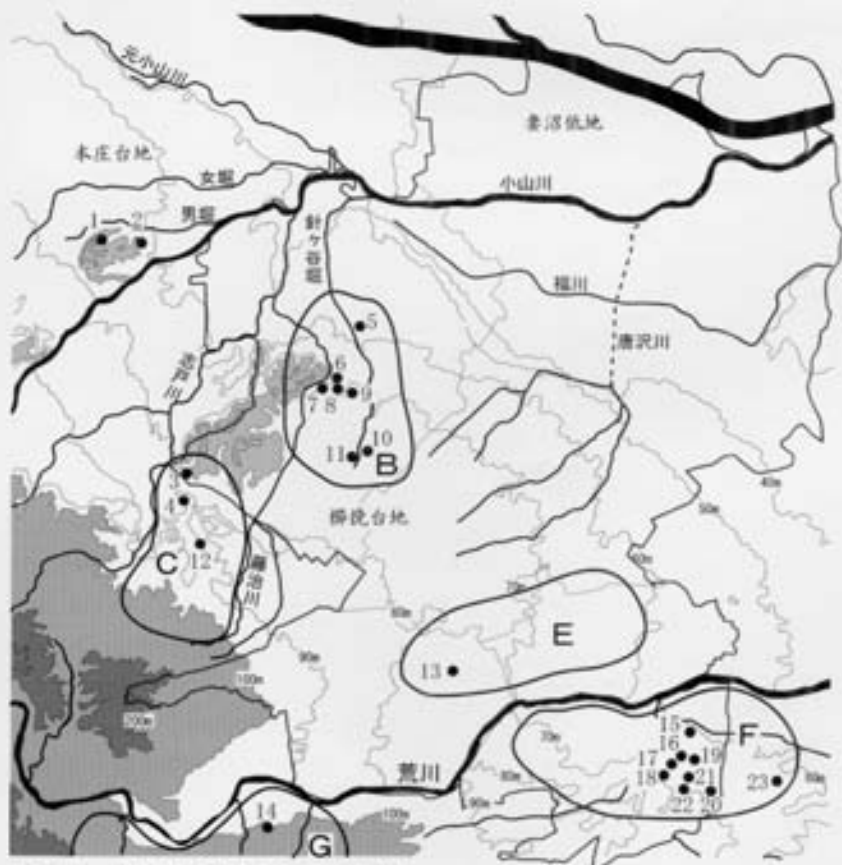
以上、古墳時代前期の深谷市域の状況を要約すると①～⑤のとおりとなる。

- ① Ⅰ地域は、隣接する児玉地域との関係が深く、深谷市域でも古墳時代前期からの開発がいち早く進行した地域である。児玉地域を含め、前方後方形周溝墓の存在は象徴的である。
- ② Ⅱ地域は、Ⅰ地域に比較し、小規模かつ点的に形成される遺跡が多く、後続する時代に遺跡数が激増することから、地域の開発が遅れるという特徴がある。
- ③ Ⅲ地域は、台耕地遺跡、宮林遺跡の2遺跡が拠点遺跡として注目できる。その前後の時代に後続する遺跡が存在しないこと等を勘案すると、極めて特異な遺跡である。
- ④ Ⅳ地域における当該期の遺跡は、弥生時代後期から連続する遺跡であり、Ⅲ地域とは好対照である。その成立背景は、Ⅲ地域とは異なるものであろう。
- ⑤ Ⅴ地域における玄番谷遺跡からは、東海、近江地方の影響を有する土器群が出土し、古墳時代前期でも古い段階に位置づけられる。藤治川流域の開発に関わる遺跡である。



- 1 有明寺北遺跡
  - 2 石森遺跡
  - 3 東光寺遺跡
  - 4 西尾+石遺跡
  - 5 西谷遺跡
  - 6 水久保遺跡
  - 7 沼田遺跡
  - 8 北尾遺跡
  - 9 如東宮B・C遺跡
  - 10 宮林遺跡
  - 11 沢口遺跡
  - 12 東方城遺跡
  - 13 西尾寺遺跡
- (中) この他、上本庄及び箱山地区において有明寺遺跡の出土が確認されている。(川本町1999)

第3図 縄文時代草創期の主要遺跡分布

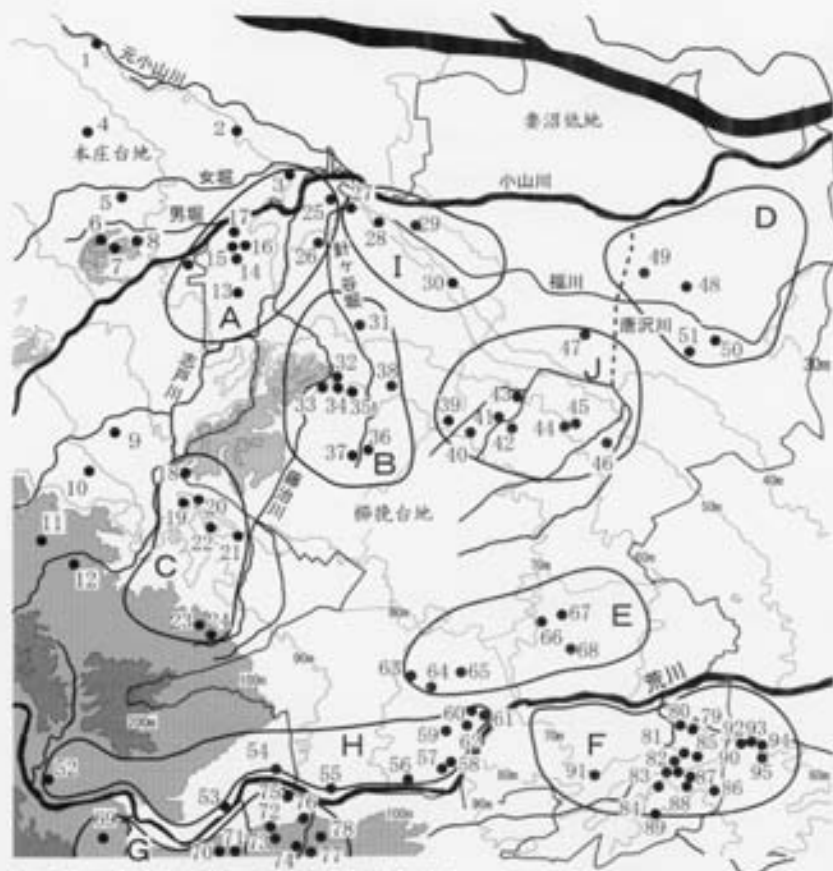


- 1 大久保山A遺跡
- 2 有明寺北遺跡 (本庄市)
- 3 北尾遺跡
- 4 如東宮B・C遺跡
- 5 西尾+石遺跡
- 6 茶臼山遺跡
- 7 西谷遺跡
- 8 水久保遺跡
- 9 中塚遺跡
- 10 北尾遺跡
- 11 沼田遺跡
- 12 阿土新込遺跡
- 13 宮林遺跡
- 14 甘粕遺跡
- 15 舟山遺跡
- 16 竹之花遺跡
- 17 白草遺跡
- 18 阿阿谷遺跡
- 19 高野+石戸遺跡
- 20 白浜木遺跡
- 21 五輪寺遺跡
- 22 西尾寺遺跡
- 23 新山遺跡

第4図 縄文時代早期の主要遺跡分布

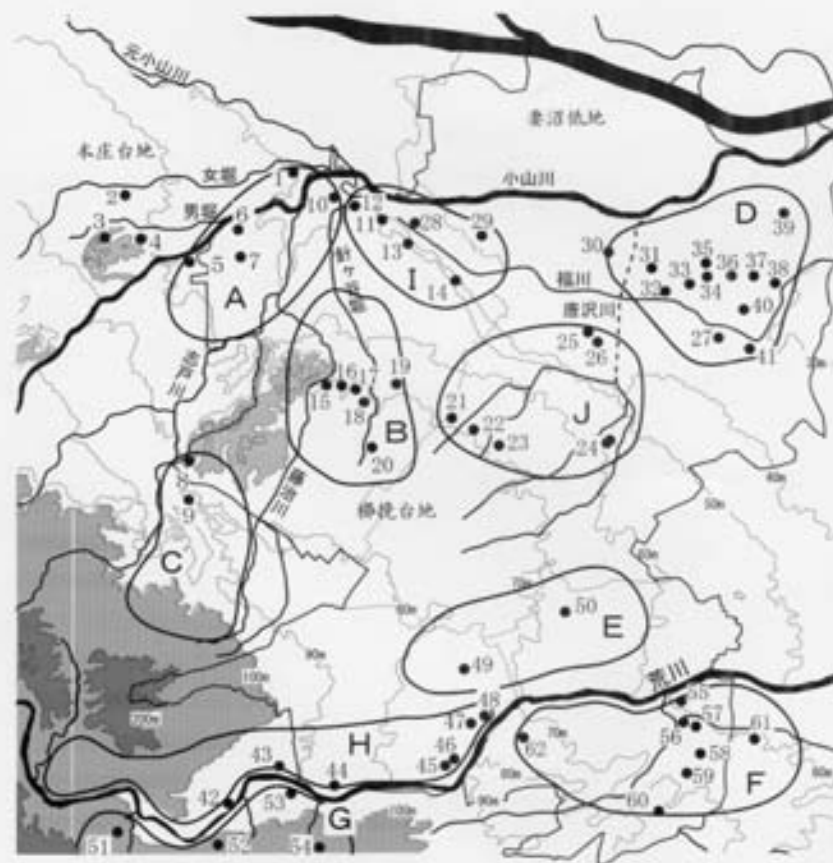
0 5km





第5図 縄文時代前・中期の主要遺跡分布

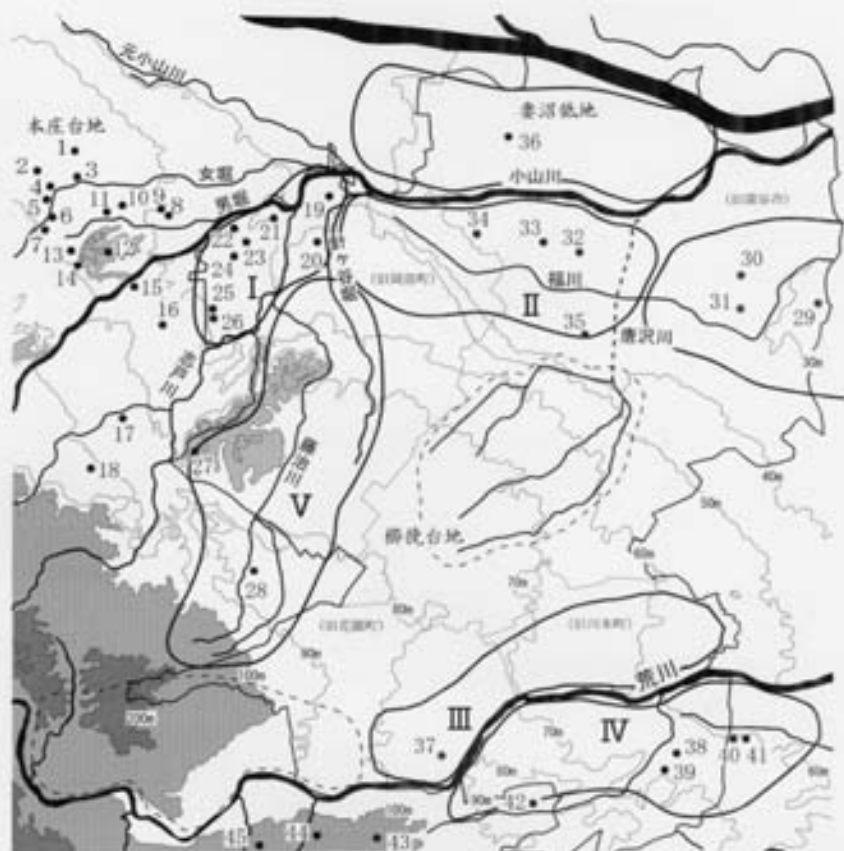
- |            |               |
|------------|---------------|
| 1 小島遺跡     | 47 深谷町遺跡      |
| 2 諏訪新田遺跡   | 48 本郷前家遺跡     |
| 3 東五十子遺跡   | 49 上敷免遺跡      |
| 4 二本和遺跡    | 50 惣平遺跡       |
| 5 公野塚古墳    | 51 笠野町東遺跡     |
| 6 大久保山人遺跡  | 52 城見上遺跡      |
| 7 大久保山日遺跡  | 53 樋の上遺跡      |
| 8 有楽寺北遺跡   | 54 塚原・北塚原遺跡   |
| 9 南志賀川遺跡   | (小畑田1・2遺跡)    |
| 10 北戸川遺跡   | 55 藤原遺跡       |
| 11 白石古墳群   | 56 花園町No.50遺跡 |
| 豊戸地区       | 57 上高野遺跡      |
| 12 白石城     | 58 台原遺跡       |
| 13 東光寺新遺跡  | 59 上高野下遺跡     |
| 14 宮西遺跡    | 60 下高野遺跡      |
| 15 神田1〜東遺跡 | 61 下高野東遺跡     |
| 16 西高野遺跡   | 62 宮台遺跡       |
| 17 大宮遺跡    | 63 西上遺跡       |
| 18 北塚遺跡    | 64 東大塚遺跡      |
| 19 芝野山     | 65 宮林遺跡       |
| 20 河下遺跡    | 66 大林1遺跡      |
| 21 中井庄     | 67 大林2遺跡      |
| (山井ノ河遺跡)   | 68 武口遺跡       |
| 22 中山遺跡    | 69 梅沢遺跡       |
| 23 用土高城遺跡  | 70 水川台遺跡      |
| 24 用土北沢遺跡  | 71 東原台遺跡      |
| 25 塚ノ石戸遺跡  | 72 甘粕町遺跡      |
| 26 水窪遺跡    | 73 ゴレン遺跡      |
| 27 西十坂遺跡   | 74 藤野子遺跡      |
| 28 上原遺跡    | 75 新毛田遺跡      |
| 29 砂田前遺跡   | 76 日向遺跡       |
| 30 菅原遺跡    | 77 上郷遺跡       |
| 31 西郷ノ谷遺跡  | 78 むじな塚遺跡     |
| 32 茶臼山遺跡   | 79 山の樫遺跡      |
| 33 西谷遺跡    | 80 舟山遺跡       |
| 34 水久保遺跡   | 81 竹之花遺跡      |
| 35 中原遺跡    | 82 白草遺跡       |
| 36 北東原遺跡   | 83 門河台遺跡      |
| 37 田端遺跡    | 84 榎岡遺跡       |
| 38 芝山遺跡    | 85 栗駒ノ谷戸遺跡    |
| 39 出口遺跡    | 86 古河木遺跡      |
| 40 島の上遺跡   | 87 西反少東遺跡     |
| 41 新田遺跡    | 88 西反少南遺跡     |
| 42 山根遺跡    | 89 地行遺跡       |
| 43 豊福松原遺跡  | 90 北塚原遺跡      |
| 44 新山西遺跡   | 91 上木田遺跡      |
| 45 新山遺跡    | 92 穂ノ沢遺跡      |
| 46 小台遺跡    | 93 富士山遺跡      |



第6図 縄文時代後・晩期の主要遺跡分布

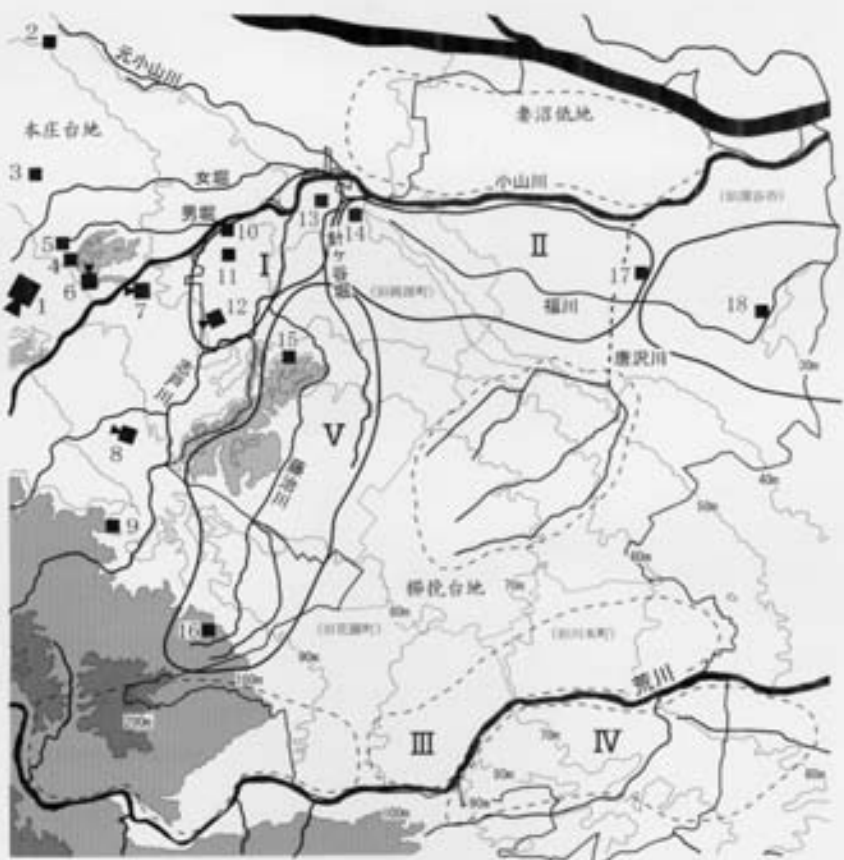
- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1 東五十子遺跡  | 32 八日市遺跡    |
| 2 公野塚古墳   | 33 本郷前家遺跡   |
| 3 大久保山人遺跡 | 34 新田東遺跡    |
| 4 有楽寺北遺跡  | 35 上敷免北遺跡   |
| 5 古川堀遺跡   | 36 新田東遺跡    |
| 6 大宮遺跡    | 37 門河台遺跡    |
| 7 宮西遺跡    | 38 原遺跡      |
| 8 北塚遺跡    | 39 砂田遺跡     |
| 9 芝野山     | 40 安ノ石戸遺跡   |
| 10 塚ノ石戸遺跡 | 41 城下遺跡     |
| 11 西十坂遺跡  | 42 樋ノ下遺跡    |
| 12 上原遺跡   | 43 塚原・北塚原遺跡 |
| 13 砂田前遺跡  | (小畑田1・2遺跡)  |
| 14 菅原遺跡   | 44 藤原遺跡     |
| 15 西谷遺跡   | 45 上高野遺跡    |
| 16 水久保遺跡  | 46 台原遺跡     |
| 17 中原遺跡   | 47 宮台遺跡     |
| 18 東谷遺跡   | 48 下高野東遺跡   |
| 19 芝山遺跡   | 49 宮林遺跡     |
| 20 北東原遺跡  | 50 大林1遺跡    |
| 21 出口遺跡   | 51 梅沢遺跡     |
| 22 島の上遺跡  | 52 八幡ヶ谷遺跡   |
| 23 前島遺跡   | 53 新毛田遺跡    |
| 24 小台遺跡   | 54 上郷西遺跡    |
| 25 深谷町遺跡  | 55 鹿島古墳群内   |
| 26 白町遺跡   | 56 山の樫遺跡    |
| 27 藤原遺跡   | 57 栗駒ノ谷戸遺跡  |
| 28 砂田前遺跡  | 58 西反少北遺跡   |
| 29 久島南遺跡  | 59 西反少南遺跡   |
| 30 轟了遺跡   | 60 地行遺跡     |
| 31 上敷免遺跡  | 61 富士山遺跡    |

0 5km



- 1 社貝遺跡
- 2 諏訪遺跡
- 3 西宮田・四方田集落
- 4 地神・市原遺跡
- 5 今井集落
- 6 長瀬遺跡
- 7 戸越田遺跡
- 8 久下遺跡
- 9 久下東遺跡
- 10 七色塚遺跡
- 11 下田遺跡
- 12 大久保山遺跡
- 13 飯玉東遺跡
- 14 雲電下遺跡
- 15 村後遺跡
- 16 日の森遺跡
- 17 南志賀川遺跡
- 18 北貝戸遺跡
- 19 原・谷戸遺跡
- 20 本庄遺跡
- 21 六反田遺跡
- 22 大栗遺跡
- 23 西浦北遺跡
- 24 宮西遺跡
- 25 石西遺跡
- 26 地神郷遺跡
- 27 大栗谷遺跡
- 28 南藤田遺跡
- 29 清水上遺跡
- 30 明戸東遺跡
- 31 宮・谷戸遺跡
- 32 戸森和原遺跡
- 33 梨合遺跡
- 34 久島南遺跡
- 35 深谷川遺跡
- 36 下千計西浦北遺跡
- 37 女耕遺跡
- 38 白草遺跡
- 39 戸阿南遺跡
- 40 建・沢遺跡
- 41 篠塚遺跡
- 42 塚田赤木遺跡
- 43 伊勢原遺跡
- 44 七丁女塚遺跡

第7図 古墳時代前期の主要遺跡分布(集落)



- 1 粟山古墳
- 2 旭・小島古墳群
- 3 諏訪遺跡
- 4 雲電下遺跡
- 5 飯玉東遺跡
- 6 塚本山古墳群
- 7 村後遺跡
- 8 南志賀川遺跡
- 9 神明・谷戸遺跡
- 10 大栗谷遺跡
- 11 沖田遺跡
- 12 石西谷遺跡
- 13 原・谷戸遺跡
- 14 西十坂遺跡
- 15 千光寺遺跡
- 16 用土北沢遺跡
- 17 上敷丸遺跡

第8図 古墳時代前期の主要遺跡分布(墳墓)

0 5km

### III 発見された遺構と遺物

#### 1. 調査の概要

今回報告する第4次調査は、平成19年3月19日から平成19年5月11日にかけて実施された。発掘調査面積は1,630㎡であり、第2・3次調査地点に隣接する。各遺構番号は、花園町遺跡調査会、深谷市教委で行った2～4次調査では、通し番号としており、1次調査は、調査主体が異なることから、2～4次とは別扱いとする。

検出された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、焼土跡2基、集石2基、土坑3基である。

竪穴住居跡は、2、3次調査で、既に9軒が検出されていることから、今回報告分の2軒を、10、11号住居跡と呼称した(第2・9図)。これらの調査成果により、本遺跡が、古墳時代前期集落としても豊富な内容を有することが判明した。2～4次調査区のうち、土器を中心とする遺物が豊富に検出されたものとして2号、4号、5号、6号、8～10号住居跡である。その他の住居跡については、所属時期等不明瞭な部分もあり、縄文時代の遺物等が出土しているもの等もあるが、住居跡の形態等を見る限り、おおむね古墳時代前期を中心とする遺構群であろう。出土土器では、東海地方の系譜を有する高坏(4号住居跡)、S字状口縁台付甕(10号住居跡)等、外来系土器の出土が目される。荒川左岸域では、台耕地遺跡で検出された古墳時代前期集落とともに稀有な存在として注目できる。古墳時代の住居跡として、この他に第1次調査3号住居跡で古墳時代後期に属する土師器(坏・甕・高坏)が出土していることから、時期が下る時期の集落の存在することが明らかである。

焼土跡、集石、土坑等は、今回の調査では、土器等が検出できなかったが、隣接する1次調査区では、縄文時代の遺物を伴う集石・土坑等が検出されていることから、該期の所産である可能性が高い。また、表土除去、遺構確認等の過程で、調査区全域から縄文時代早期から中期にかけての遺物が検出されており、これらについてはグリッド出土遺物として取り扱うこととする。

遺構等の調査終了後、旧石器、縄文時代草創期の遺物・遺構の有無を明確とするために、調査区北部に5箇所のトレンチを設定し、遺構・遺物の存在について注意しながら、ローム層上面を5～

10cm削る程度に掘り下げを行っている。トレンチ内からは遺物・遺構等は確認できなかった。

#### 2. 発見された遺構と遺物

##### (10号竪穴住居跡)

調査区の南西端に位置する。規模・平面形は、一辺が600cmの正方形を呈する。主軸方位はN-15°-Wを測る。床面から確認面までの深さは25cmであり、床面は、ほぼ平坦である。炉は、中央よりやや北西にずれる位置にある。炉の規模は、長軸95cm、短軸60cm、深さ10cmを測る。平面形は、楕円形となる。床面からはピットが検出されている。出土遺物は、床面直上より豊富に出土している。出土遺物には、古墳時代前期に属する壺、高坏、鉢、甕、台付甕等が、床面直上より出土している。

##### (11号竪穴住居跡)

調査区南部東よりに検出されている。10号住居跡とは、6mの距離を置く。規模は、一辺が360～370cmであり、平面形は、正方形に近い。主軸方位は、N-13°-Wであり、10号住居跡に近い。確認面から床面までの深さは20cmであり、床面は、ほぼ平坦である。周溝は、住居跡壁際に巡るが、南東コーナーから南壁にかけて途切れる箇所が存在する。周溝の深さは、床面から10cmである。

柱穴は、住居跡コーナー付近に検出されている。南西コーナーではピット2基の切り合いが認められ、北西コーナーではピット2基が検出されている。遺物は、検出することができなかったが、主軸方位や平面形が10号住居跡と近似していることから古墳時代前期とした。

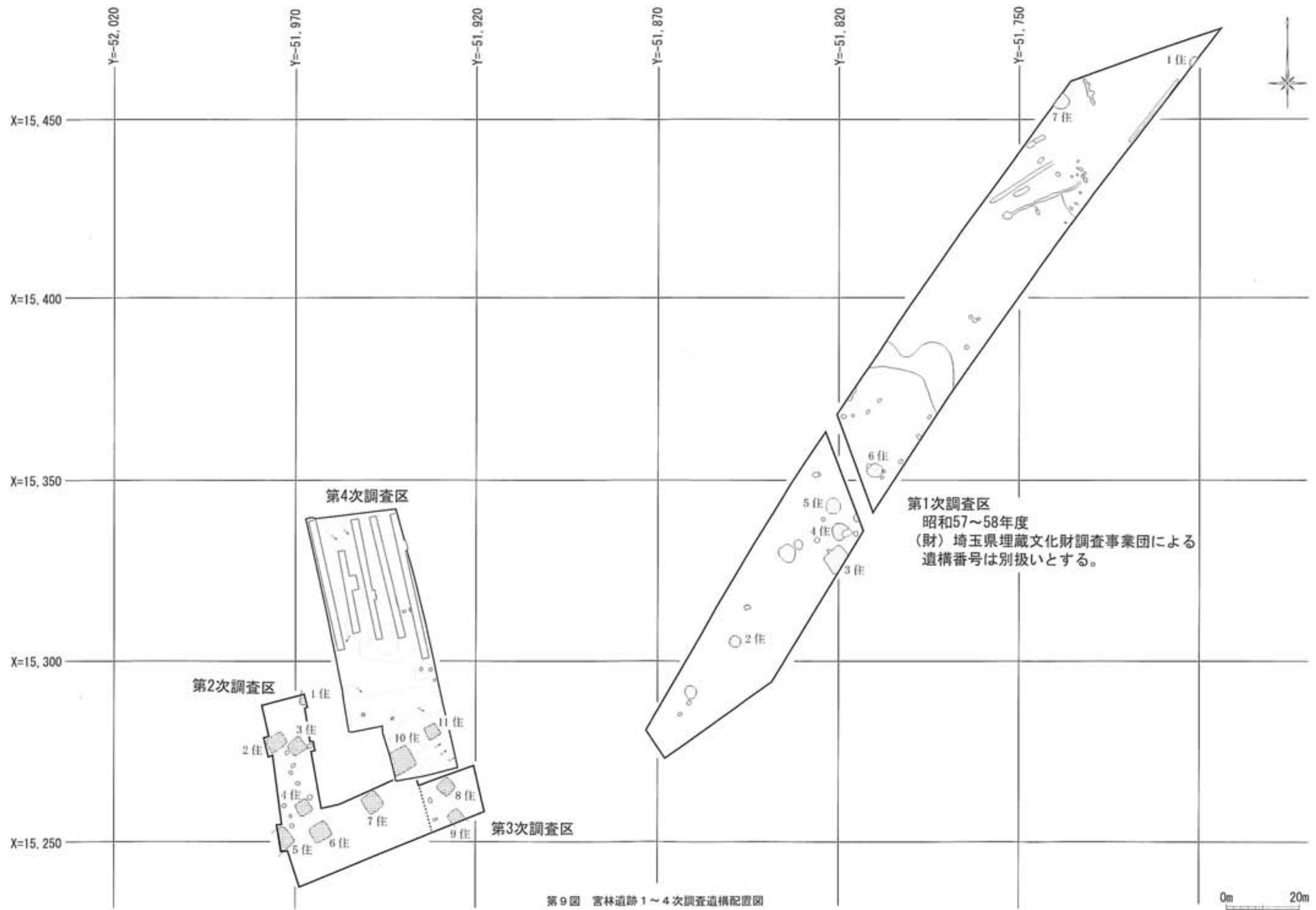
##### ・焼土跡

##### (1号焼土跡)

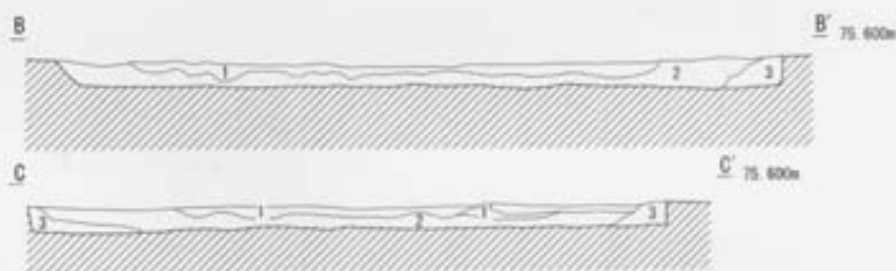
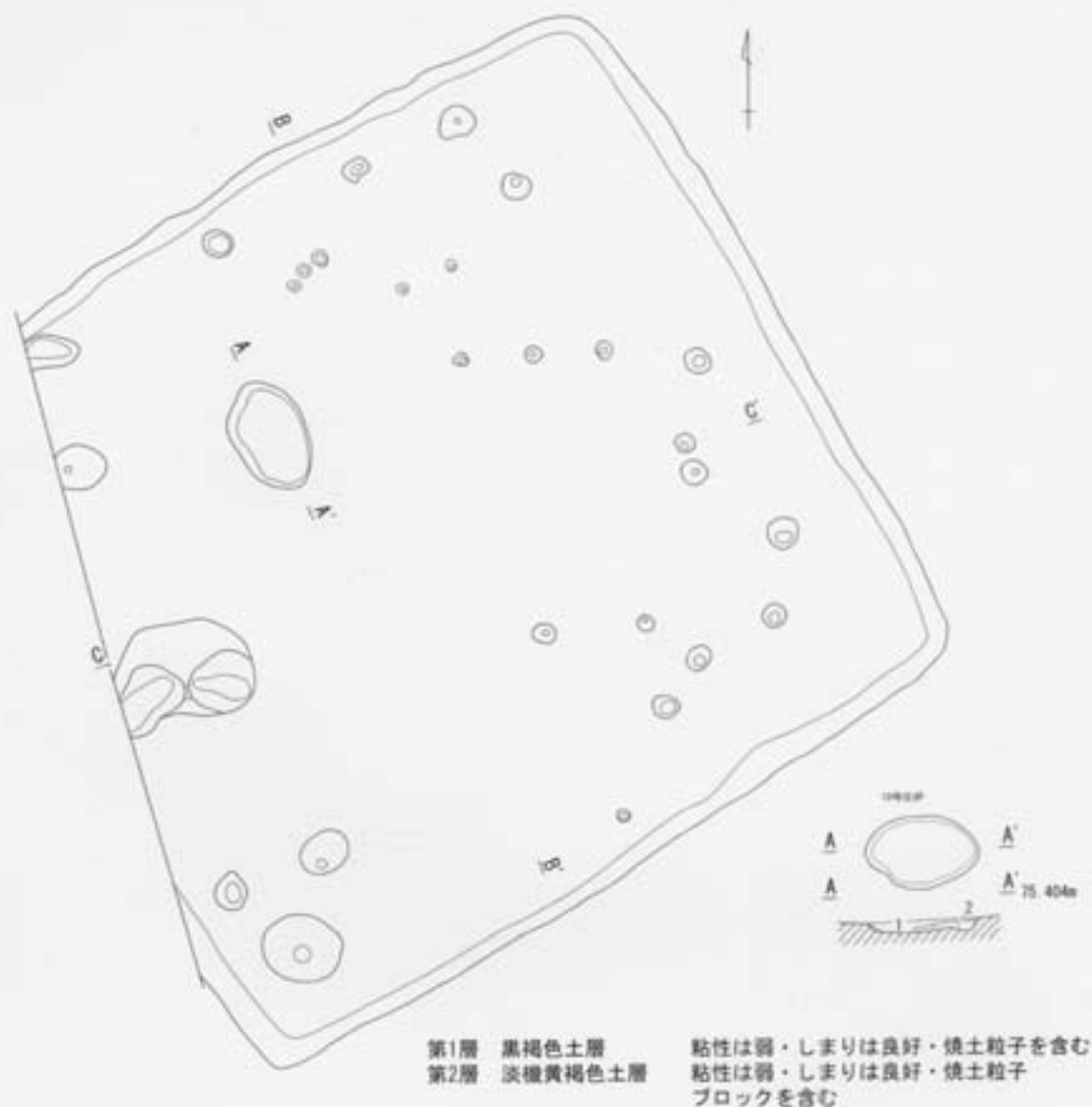
調査区中央より、やや南東よりに位置する。周囲には1号、2号集石がある。規模は、長軸105cm、短軸78cmであり、平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、N-8°-Wである。確認面から底面までの深さは12cmを測る。底面は、平坦であり、断面形は皿状となる。土層断面を見る限り、焼土は中央付近に多く堆積し、周辺は少ない。遺物は、検出されなかった。

##### (2号焼土跡)

調査区中央より、やや南西よりに位置する。10



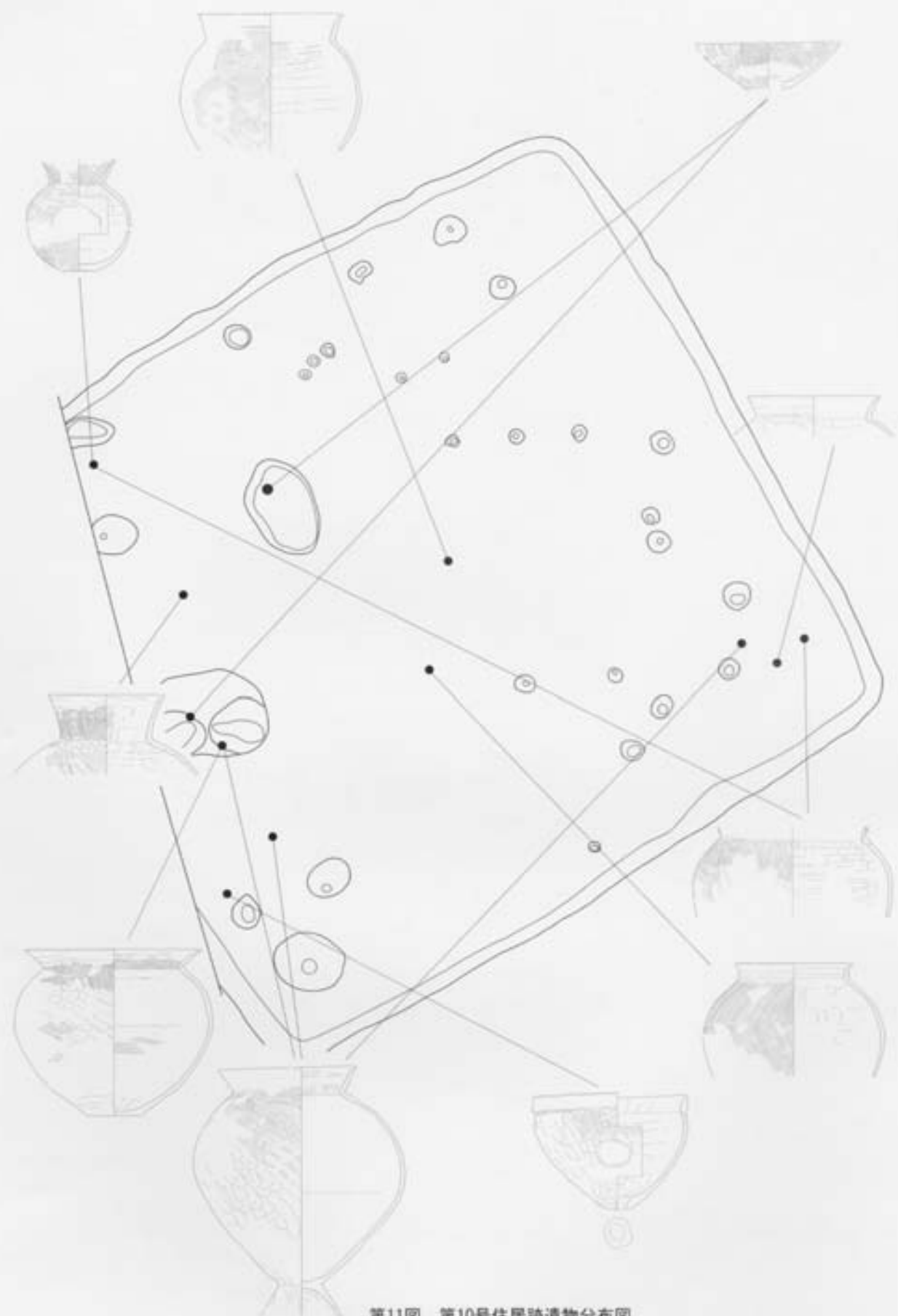
第9図 宮林遺跡1～4次調査遺構配置図



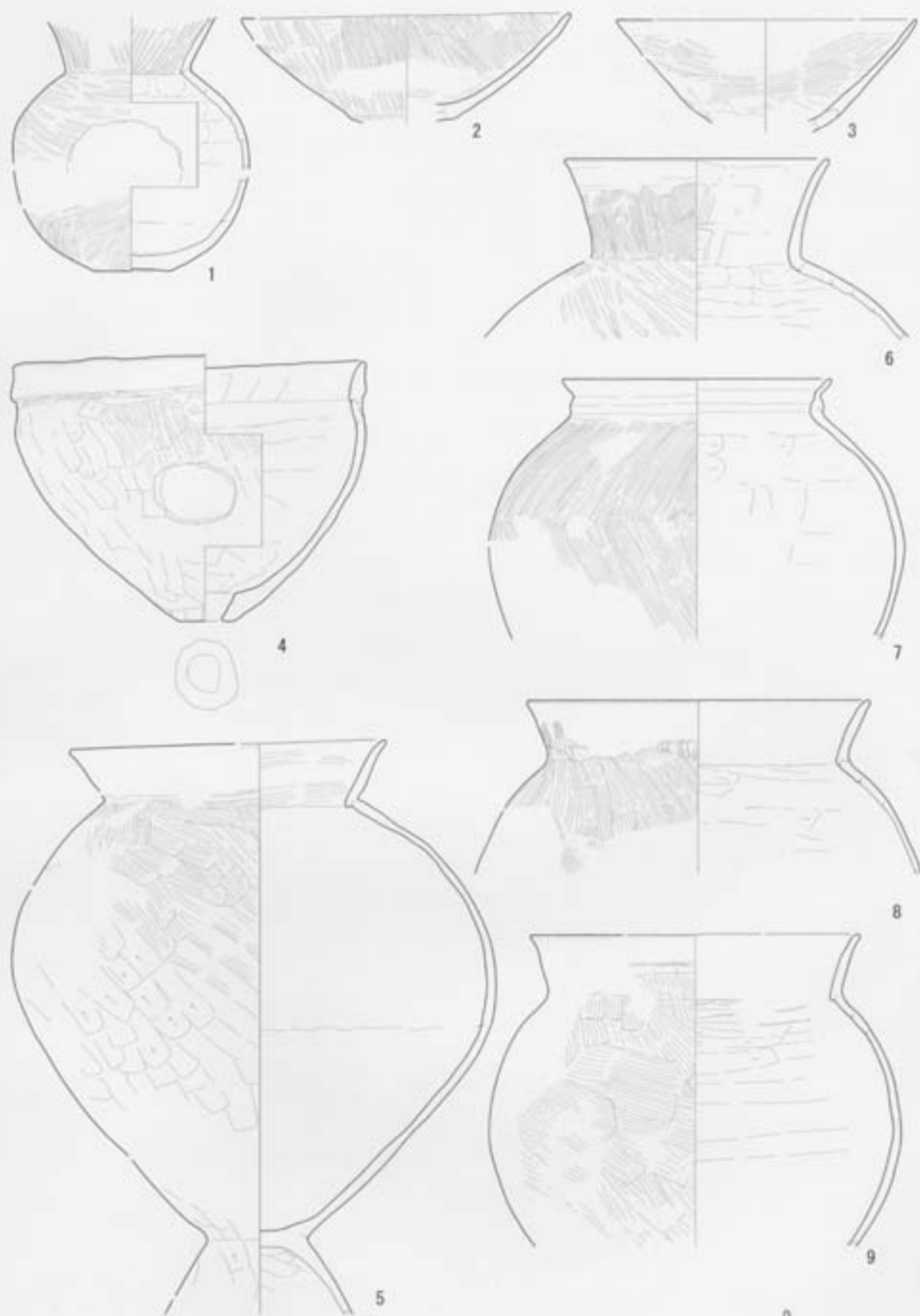
- |      |       |   |
|------|-------|---|
| 第1層  | 黒褐色土層 | 覆土最上層である黒色味が一番強く、粒子は細かく、粘性は弱・しまり良好            |
| 第1'層 | 黒褐色土層 | 1層とほぼ近似するも、黄褐色粒子をやや多く含む・粘性・しまりについては、第1層と近似する  |
| 第2層  | 褐色土層  | 覆土の中心となる土層である・ローム粒子や炭化物粒子を多く含む・粘性はやや強く、しまりは良好 |
| 第3層  | 淡褐色土層 | 壁寄りにのみ堆積する・粘性はやや強・しまりは良好                      |

第10図 第10号住居跡

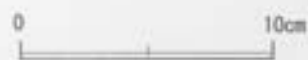




第11圖 第10号住居跡遺物分布圖

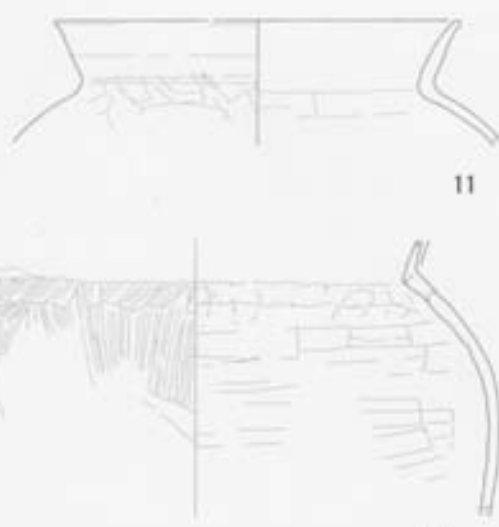


第12図 第10号住居跡出土土器(1)





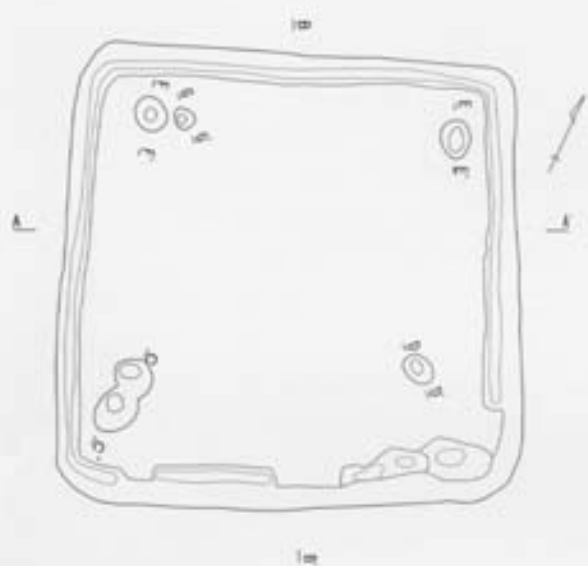
10



11

10号住居跡出土遺物(2)

0 12 10cm



1m



-1

- |     |         |             |
|-----|---------|-------------|
| 第1層 | 黒褐色土層   | 粘性やや強・しまり良好 |
| 第2層 | 茶褐色土層   | 粘性弱・しまり悪    |
| 第3層 | 淡黄褐色土層  | 粘性弱・しまり悪    |
| 第4層 | 黄褐色砂質土層 | 粘性弱・河床砂礫層   |

0 2m



75.500m



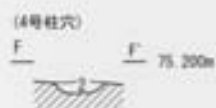
72.400m



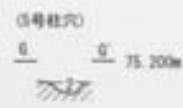
75.200m



75.200m



75.200m



75.200m

0 1m

- |     |          |                                     |
|-----|----------|-------------------------------------|
| 第1層 | 黒褐色土層(1) | 粘性は弱・しまり良好・炭化物粒子を含む                 |
| 第2層 | 黒褐色土層(2) | 粘性は強・しまりは悪・ローム近似であるが砂粒の多い黄褐色土を粒状に含む |
| 第3層 | 淡黄褐色砂質土層 | 粘性は強・しまりは悪・ローム近似であるが砂粒を多く含む         |

第14図 第11号住居跡

遺物番号	注記	器種	口径 (cm)	高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	MB-4 10住 001	土師器 小型壺	-	(13.5)	4.0	白色粒、赤色粒、 石英、雲母	普通	橙褐色	70%	器形 口縁部外反、胴部球脚状、胴部中央に径8.0cm程の穿孔。調整 外面 口縁部ハケ後ハケも、胴部ハケ後ハケも、内面 口縁部ハケ後ハケも、胴部指頭圧痕、ハケ。
2	MB-4 10住 003、025	土師器 高杯 杯部	17.2	(5.8)	-	白色粒、赤色粒、 褐色粒	やや不具	褐色	40%	器形 口縁部は大きく開きつつ体部との境でごく狭く内に傾く。体部は接合部近くで緩をもつ。調整 外面 口縁部ハケ、体部ハケ後ハケも、内面 口縁部ハケ、体部ハケ後ハケも、ハケ後ハケも。 ※内外面赤彩?
3	MB-4 10住	土師器 高杯 杯部	13.7	(8.0)	-	小礫、赤色粒	やや不具 二次被熱	赤褐色	40%	器形 口縁部 接合部により急傾斜で立ち上がる。体部下端にごくゆるい緩をもつ。調整 外面 口縁部ハケ、体部ハケ後ハケも、内面 口縁部ハケ、体部ハケ後ハケも。 ※遺存状態が悪く、調整不鮮明。
4	MB-4 10住 012	土師器 甗	18.3	14.2	底径 3.0 孔径 2.0	白色粒、褐色粒、 赤色粒	普通	明褐色	100%	器形 口縁部折り返し、大きく開き底部に向けてすばまる。単孔、胴部中央に穿孔。調整 外面 口縁部ハケ、胴部上半ハケ後ハケも、下半ハケ、下縁ハケも、内面 口縁部ハケ、胴部ハケ及びハケ。
5	MB-4 10住 005、010、 018他	土師器 台付甗	16.4	(9.7)	-	小礫	普通 二次被熱	暗褐色	50%	器形 口縁部外反、胴上部に最大径をもち、接合部に向けてすばまる。脚部短い「h」の字状。調整 外面 口縁部ハケ、胴部ハケ後ハケも、内面 口縁部ハケ後ハケも、胴部ハケ後ハケも、脚部ハケ後ハケも、脚部指頭圧痕及びハケ。 ※外面及び口縁部内面赤彩?
6	MB-4 10住 002	土師器 壺	13.8	(9.7)	-	白色粒、赤色粒、 雲母	普通	褐色	23%	器形 口縁部緩やかに外反、胴部球脚状を呈すると思われる。調整 外面 胴部緩やかなハケ後ハケも、胴部ハケ後ハケも、内面 口縁部ハケ後ハケも、胴部指頭圧痕及びハケ。 ※外面及び口縁部内面赤彩?
7	MB-4 10住 006、016	土師器 甗	(14.0)	(13.9)	-	白色粒、褐色粒、 金雲母	普通	暗褐色～赤 褐色	40%	器形 口縁部短く外反、胴部球脚状。調整 外面 口縁部ハケ、胴部斜位ハケ、内面 口縁部ハケ、胴部ハケ及びハケ。 ※外面保付者。
8	MB-4 10住 SW	土師器 甗	(17.8)	(9.2)	-	白色粒、褐色粒、 赤色粒	普通	褐色	13%	器形 口縁部緩く外反し立ち上がる。胴部球脚状を呈するか? 調整 外面 口縁部ハケ、胴部斜位・横位のハケ、内面 口縁部ハケ、胴部ハケ。
9	MB-4 10住 017	土師器 甗	17.2	(16.0)	-	白色粒、褐色粒	普通	明褐色	40%	器形 口縁部直立気味、やや外反、胴部球脚状。調整 外面 口縁部ハケ、胴部大きめのハケ後ハケによる縦位・斜位のハケ、内面 口縁部ハケ、胴部ハケ。 ※外面保付者。
10	MB-4 10住 005	土師器 甗	21.2	20.2	6.3	小礫、赤色粒	普通 二次被熱 ?	赤褐色	50%	器形 口縁部大きく外反、胴部屈曲、胴部球脚状、平底。調整 外面 口縁部ハケ、胴部～胴部中位縦・斜位の緩やかなハケも、胴部下半ハケも、内面 口縁部横位ハケ、胴部ハケ一部横位ハケ。
11	MB-4 10住 019	土師器 甗	(15.7)	(5.0)	-	白色粒、 赤色粒、雲母	やや不具	明褐色	10%	器形 口縁部外反、口唇部やや角張状、胴部「く」の字状を呈する。調整 外面 口縁部ハケ、胴部ハケ、内面 口縁部ハケ、胴部ハケ。
12	MB-4 10住 001、021	土師器 甗	-	(11.0)	-	白色粒、褐色粒	普通	褐色	15%	器形 胴部球脚状を呈すると思われる。調整 外面 胴部ハケ後ハケ、内面 指頭圧痕、ハケ。 ※外面保付者。

第1表 第10号住居跡出土土器観察表

号住居跡の北方8mに位置する。規模は、長軸90cm、短軸70cmであり、平面形は、楕円形を呈する。主軸方位は、 $N-78^{\circ}-E$ である。確認面から底面までの深さは12cmを測る。底面は、平坦であり、断面形は皿状となる。土層断面を見る限り、焼土は中央付近に多く堆積し、周辺は少ない。遺物は検出されなかった。

#### ・集石

##### (1号集石)

F-4グリッドに位置する。1号焼土跡、2号集石が近接する。

規模は、長軸95cm、短軸90cmを測る。平面形は、略円形を呈する。確認面から、底面までの深さは48cmである。底面は、ほぼ平坦であり、壁は直線的に立ち上がる。集石は、上層から中層にかけて組んだ状態で検出されている。遺物は検出されなかった。

##### (2号集石)

F-4グリッドに位置する。1号集石の南側に所在する。

規模は、長軸74cm、短軸72cmを測る。平面形は略円形を呈する。確認面から底面までの深さは、38cmである。底面は1号集石に比較しやや丸みを有し、壁は直線的に立ち上がる。集石は、上層から中層にかけて組んだ状態で検出されている。集石の最深部には、比較的大きな川原石が敷かれている。遺物は、検出されなかった。

#### ・土坑

##### (1号土坑)

D-4グリッドに位置する。規模は、長軸100cm、短軸72cmを測る。平面形は楕円形を呈する。主軸方位は $N-80^{\circ}-E$ である。確認面からの深さは10cmである。底面は、平坦であり、断面形は皿状を呈する。土坑東端に小ピットが掘られているが、新旧関係は、不明である。遺物は検出されなかった。

##### (2号土坑)

D-3~4グリッドに位置する。2基の土坑が切り合っており、便宜的2a、2b号土坑と呼称する。

2a号土坑の規模は、長軸80cm、短軸70cmを測

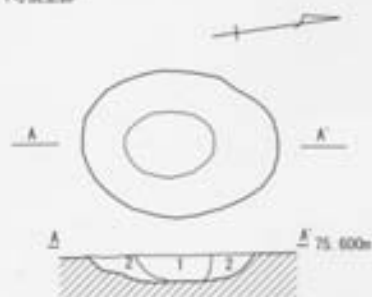
る。平面形は、略円形を呈する。確認面から底面までの深さは28cmであり、底面には小型のピットが掘られている。壁は直線的に立ち上がる。2b号土坑は、2a号土坑に切られている。現存する規模は長軸46cm、短軸50cmであり、平面形は楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは、15cmを測る。断面形は皿状を呈すると考えられるが、2a号土坑に切られているため全体像は不明である。遺物は検出されなかった。

##### (3号土坑)

G-2グリッドに位置する。規模は、長軸65cm、短軸54cmを測る。平面形は楕円形を呈する。主軸方位は $N-82^{\circ}-E$ である。確認面から底面までの深さは6cmであり、断面形は、皿状を呈する。遺物は検出されなかった。



1号焼土跡



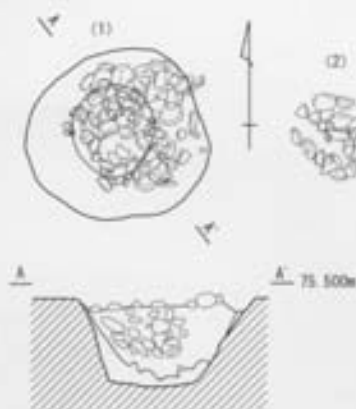
第1層 赤褐色土層 焼土粒子を多く含む・粘性は弱・しまりは良好  
 第2層 淡赤褐色土層 ローム粒子と砂粒を多く含む・1層に比べ、焼土粒子の量は少ない・粘性はやや強・しまりは良好

2号焼土跡

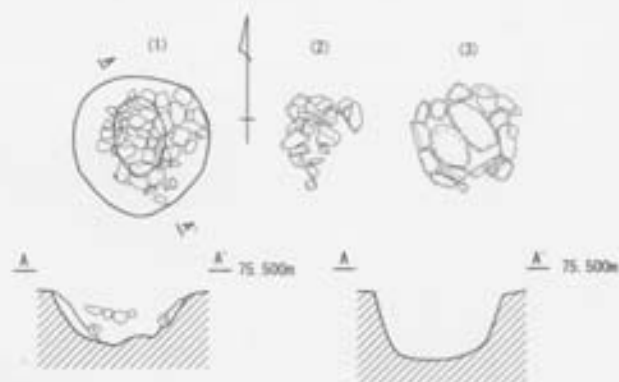


第1層 赤褐色土層 焼土粒子、ブロックを多く含む・粘性は弱・しまりは良好  
 第2層 淡赤褐色土層 ローム粒子を多く含む・1層に比べ、焼土粒子の量は少ない・粘性はやや強・しまりは良好

1号集石



2号集石



1号土坑



第1層 黄褐色土層 黄褐色ローム粒子を多く含む・粘性は弱・しまりは良好  
 遺物の出土は無し

2号土坑

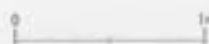


第1層 黄褐色土層 下層に行くほどロームの粒子の混入が多くなる  
 粘性は弱・しまりは良好・遺物の出土は無し

3号土坑



第1層 黄褐色土層 粘性はやや強・しまりは良好  
 層中にロームブロック直径10~20mmを含む

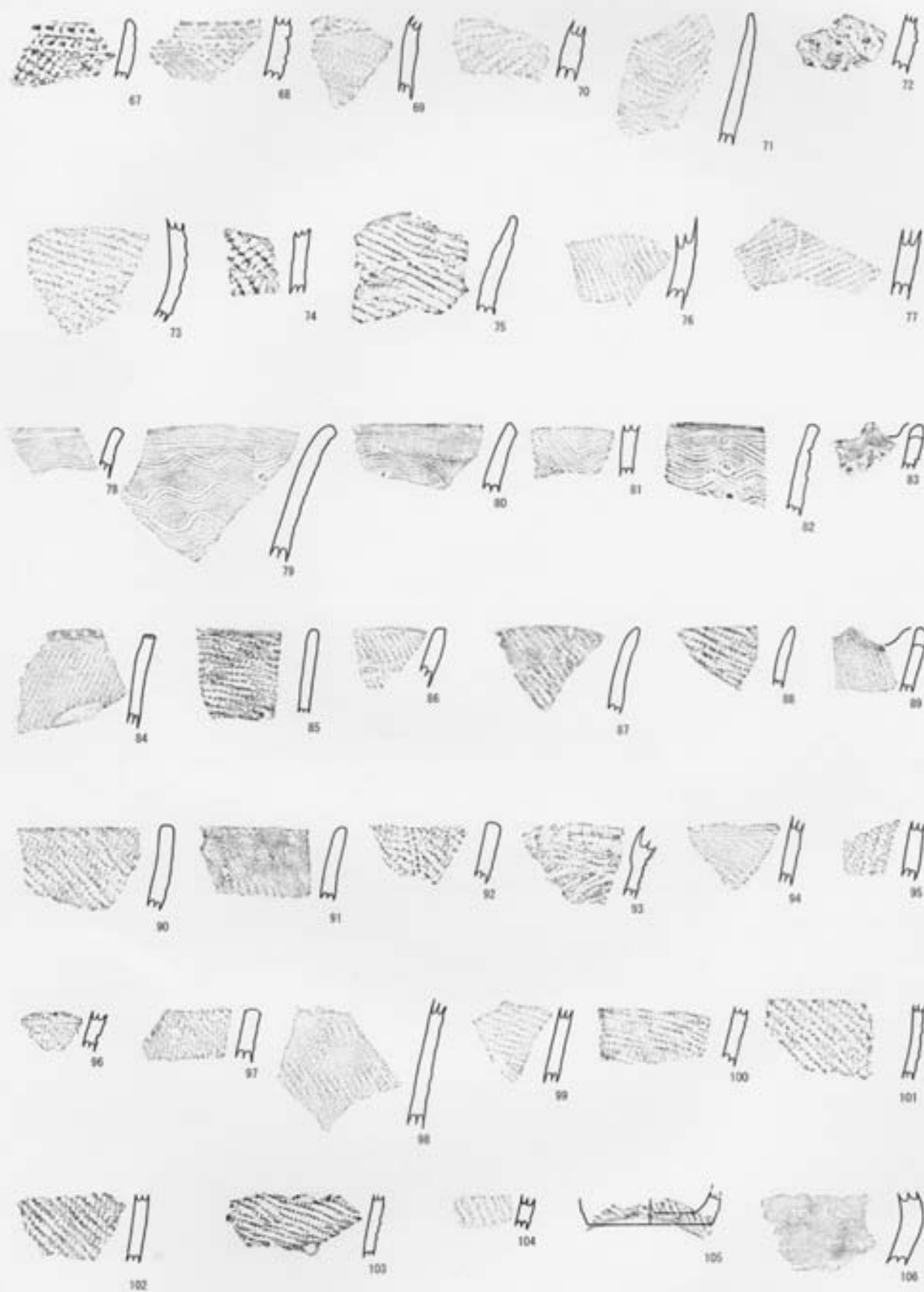


1/40

第15図 焼土跡・集石・土坑

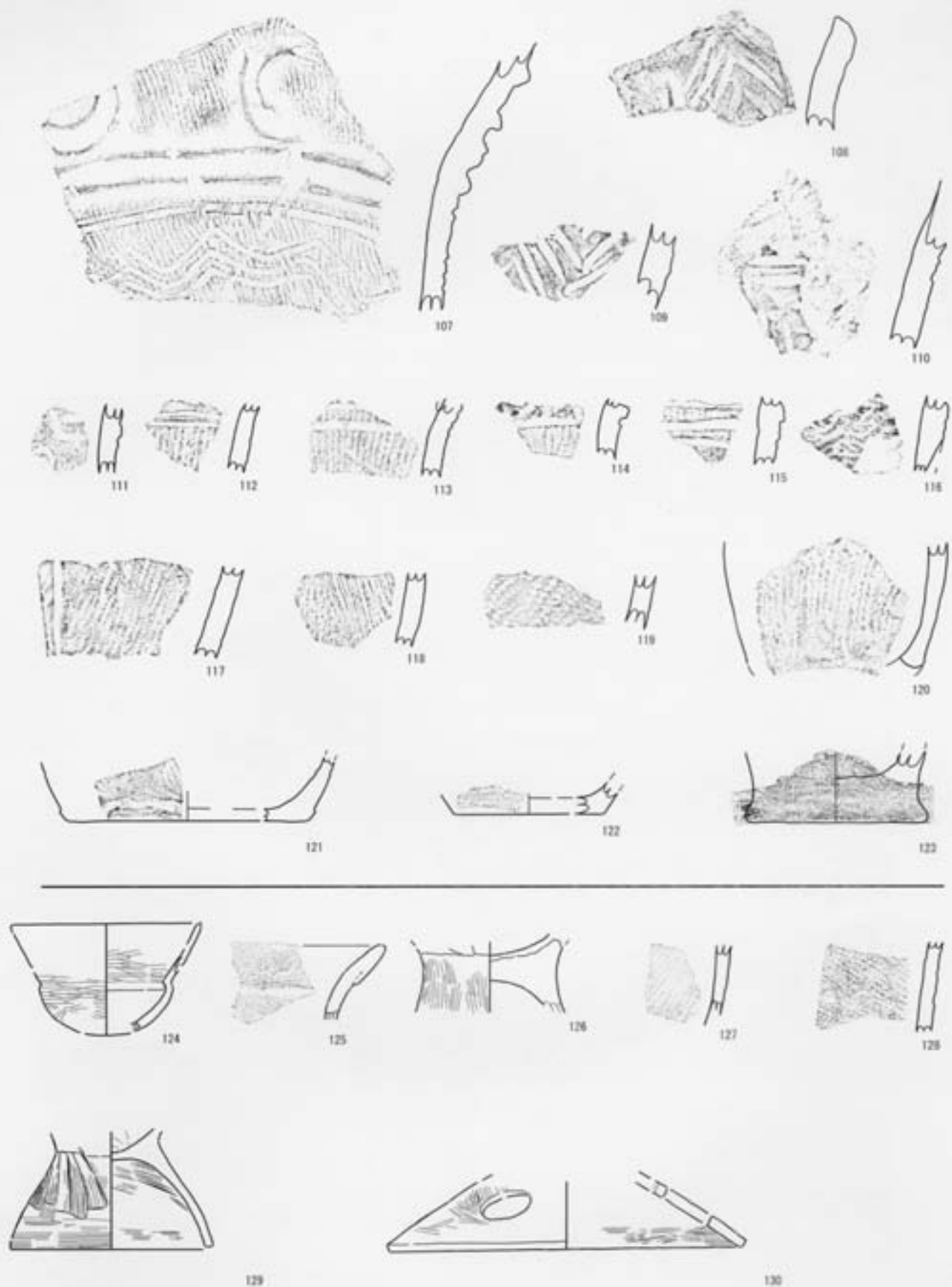


第16図 グリッド出土土器(1)



第17図 グリッド出土土器(2)





第18図 グリッド出土土器(3)

0 10cm

NO.	部 位	境 成	混 入 物	色 調	文 様	備 考
1	口縁部	良好	砂粒、バミス	暗褐色	燃系L	
2	口縁部	良好	砂粒、バミス	暗褐色	燃系L	
3	口縁部	良好	バミス	褐色	燃系R	肥厚口唇
4	口縁部	良好	バミス	褐色	燃系L	肥厚口唇
5	口縁部	良好	バミス	暗褐色	燃系R	
6	口縁部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
7	口縁部	良好	少	明褐色	燃系L	
8	口縁部	良好	少	褐色	燃系L	
9	口縁部	良好	バミス	褐色	燃系L	
10	口縁部	良好	少	褐色	燃系L	
11	口縁部	良好	少	褐色	燃系L	
12	口縁部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
13	口縁部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
14	口縁部	良好	少	褐色	燃系L	
15	口縁部	良好	少	褐色	燃系R	
16	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系L	
17	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
18	胴部	良好	少	明褐色	燃系R	
19	胴部	良好	少	明褐色	燃系L	
20	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系R	
21	胴部	良好	砂粒	暗赤褐色	燃系R	
22	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
23	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
24	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
25	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
26	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
27	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系L	
28	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
29	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
30	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
31	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
32	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
33	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系L	
34	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
35	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
36	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
37	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
38	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
39	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系L	
40	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系L	
41	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
42	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系L	
43	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系L	
44	胴部	良好	砂粒	褐色	燃系R	
45	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系L	
46	胴部	良好	少	明褐色	燃系L	
47	胴部	良好	砂粒、バミス	明褐色	燃系R	
48	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
49	胴部	良好	少	褐色	燃系L	
50	胴部	良好	砂粒少	褐色	燃系L	
51	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	
52	胴部	良好	バミス	明褐色	燃系L	
53	口縁部	良好	砂粒	褐色	無文	
54	口縁部	良好	少	褐色	無文	
55	口縁部	良好	砂粒	褐色	無文	
56	口縁部	良好	砂粒	褐色	無文	
57	口縁部	良好	砂粒	褐色	無文	
58	口縁部	良好	砂粒	褐色	無文	
59	口縁部	良好	砂粒	褐色	無文	
60	胴部	良好	砂粒	褐色	無文	
61	胴部	良好	砂粒	褐色	無文	
62	胴部	良好	砂粒	褐色	無文	
63	胴部	良好	砂粒	褐色	無文	
64	胴部	良好	砂粒	明褐色	燃系R	土製円盤土器片利用
65	胴部	良好	少	褐色	燃系R	土製円盤土器片利用

第2表 グリッド出土土器観察表(1)



NO.	部 位	焼 成	混 入 物	色 調	文 様	備 考
66	胴部	良好	砂粒	褐色	条痕文	拓図なし
67	口縁部	良好	少	褐色	竹管文	
68	胴部	良好	砂粒少	褐色	竹管文	
69	口縁部	良好	砂粒少	褐色	縄文RL	
70	胴部	良好	少	褐色	縄文R	
71	口縁部	良好	砂粒少	褐色	縄文L	
72	胴部	良好	砂粒少	明褐色	縄文RL	
73	胴部	良好	少	暗褐色	縄文LR	
74	胴部	良好	少	褐色	縄文RL	
75	胴部	良好	少	褐色	縄文LR	
76	胴部	良好	少	褐色	縄文LR	
77	胴部	良好	砂粒	明褐色	縄文RL	
78	口縁部	良好	少	褐色	竹管文	
79	口縁部	良好	少	明褐色	竹管文	
80	口縁部	良好	少	褐色	竹管文	
81	胴部	良好	少	褐色	竹管文	
82	口縁部	良好	少	褐色	竹管文	
83	口縁部	良好	少	明褐色	竹管文	波状口縁
84	口縁部	良好	少	明褐色	縄文L	
85	口縁部	良好	少	明褐色	縄文RL	
86	口縁部	良好	少	明褐色	縄文R	
87	口縁部	良好	少	明褐色	縄文RL	
88	口縁部	良好	少	明褐色	縄文RL	
89	口縁部	良好	少	明褐色	縄文RL	波状口縁
90	口縁部	良好	少	暗褐色	縄文RL	
91	口縁部	良好	少	赤褐色	縄文RL	
92	胴部	良好	少	赤褐色	縄文RL	
93	胴部	良好	少	褐色	縄文LR	
94	胴部	良好	少	赤褐色	縄文RL	
95	胴部	良好	少	明褐色	縄文LR	
96	胴部	良好	少	明褐色	竹管文	
97	胴部	良好	少	明褐色	縄文RL	
98	胴部	良好	少	明褐色	縄文RL	
99	胴部	良好	少	明褐色	縄文RL	
100	胴部	良好	少	褐色	縄文RL	
101	胴部	良好	砂粒	褐色	縄文RL	
102	胴部	良好	少	明褐色	縄文RL	
103	胴部	良好	少	明褐色	縄文RL	
104	胴部	良好	少	赤褐色	縄文RL	
105	底部	良好	少	赤褐色	縄文RL	
106	胴部	良好	砂粒	赤褐色	無文	
107	胴部	良好	砂粒	赤褐色	隆線文	
108	胴部	良好	砂粒	褐色	隆線文	
109	胴部	良好	砂粒	褐色	隆線文	
110	胴部	良好	砂粒	褐色	隆線文	
111	胴部	良好	少	赤褐色	沈線	
112	胴部	良好	少	赤褐色	沈線	地文燃糸
113	胴部	良好	少	赤褐色	沈線	地文燃糸
114	胴部	良好	砂粒	明褐色	沈線	地文縄文R L
115	胴部	良好	砂粒少	赤褐色	沈線	地文縄文R L
116	胴部	良好	砂粒少	褐色	波状沈線	
117	胴部	良好	砂粒	赤褐色	沈線	地文縄文R L
118	胴部	良好	砂粒少	赤褐色	燃糸L	
119	胴部	良好	砂粒少	褐色	縄文R L	
120	底部	良好	砂粒	赤褐色	燃糸L	
121	底部	良好	少	褐色	縄文R L	
122	底部	良好	砂粒	赤褐色	無文	
123	底部	良好	砂粒	褐色	無文	
124	小型埴	良好	石英、チャート	橙褐色	ハラミガキ	
125	甕	良好	石英、チャート、長石	黄褐色	ナデ	
126	甕	良好	石英、チャート、長石	明橙褐色		
127	甕	良好	石英、チャート、長石	黄褐色		
128	甕	良好	石英、チャート、長石	黄褐色		
129	台付甕脚部	良好	石英、チャート、角閃石	灰橙褐色	ハケメ	
130	高坏脚部	良好	石英、チャート、角閃石	赤褐色	ハケメ、ナデ	

第3表 グリッド出土土器観察表(2)

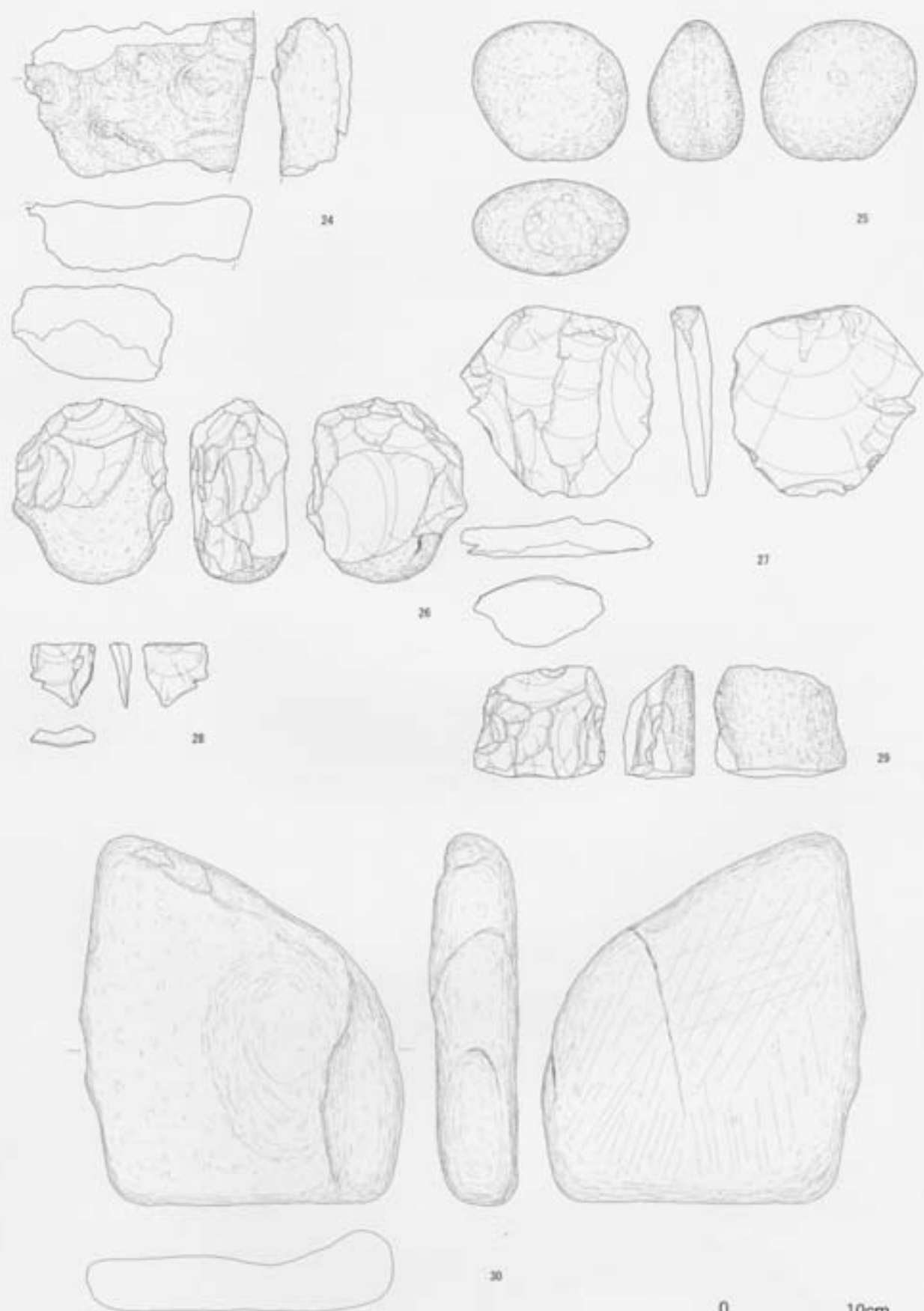


第19圖 石器実測圖(1)



第20圖 石器実測圖(2)

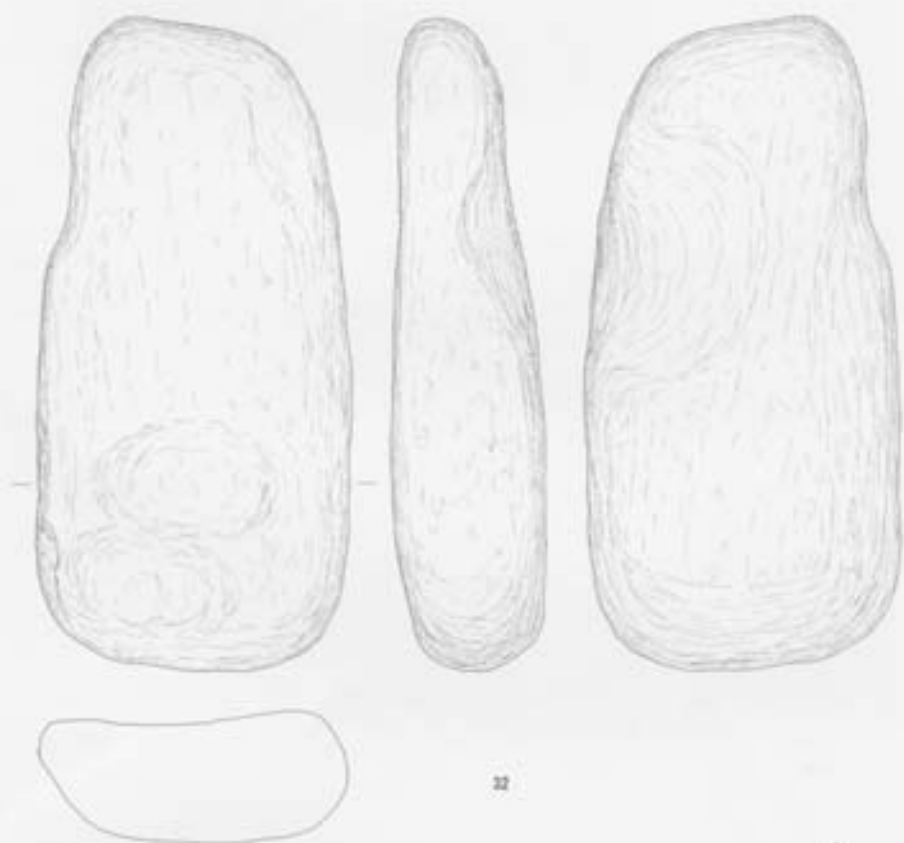
0 10cm



第21圖 石器実測圖(3)



31



32



第22圖 石器実測圖(4)



( ) 内数値は現存値

No.	遺存状況 (%)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	説 明	器 種	石 材
1	90	(1.6)	1.3	0.4	0.8	基部に比較的深い抉りをもつ凹基縁で二等辺三角形。先端が欠損。	石 鎌	チャート
2	100	2	1.5	0.35	0.9	基部に浅い抉りをもつ凹基縁で二等辺三角形。先端部、基部の調整が細かく行われている。	石 鎌	チャート
3	90	(2.6)	(1.5)	0.4	1.1	基部に比較的深い抉りをもつ凹基縁で二等辺三角形。脚部両端と先端部が欠損。	石 鎌	ガラス質 黒色安山岩
4	100	1.65	1.55	0.3	0.6	基部がほぼ平らな平基縁で、先端部がすばまり尖る。先端、基部中央に非常に細かい調整が施される。	石 鎌	黒曜石
5	100	1.2	1	0.25	0.2	基部に浅い抉りをもつ凹基縁で非常に小型。先端部はすばまり尖る。剥片面を中央部に残し、縁部のみ細かい調整が施されている。	石 鎌	チャート
6	95	(10.2)	5.5	2.1	138.2	形状は楕円形。裏面には大きな主要剥離面を、表面中央部に自然面を残し側縁部より表裏とも多くの剥離が施される。右側縁中央部は敲打により稜が潰されている。	打製石斧	緑色岩
7	90	(8.9)	6.2	1.9	134.1	形状は楕円形か。上部、刃部を欠損。裏面には大きな主要剥離面を残す。風化著しい。	打製石斧	ホルンフェルス
8	75	(10.6)	(5.2)	1.9	106.7	形状は楕円形か。上部、刃部を欠損。左右側縁部に細かな剥離が施されている。風化著しい。	打製石斧	ホルンフェルス
9	85	(12.7)	6.4	(4.2)	447.5	形状は蛤形。非常に肉厚。全体が被熱により赤色化。上部の欠損後、被熱により裏面を大きく火はね欠損。調整の為の敲打も確認できるが、被熱により器面が非常荒れており、範囲は不明。	磨製石斧	片岩
10	不明	(12.4)	6.4	(4.7)	512.5	元の器種は蛤形磨製石斧。肉厚。刃部欠損後、全体が被熱により赤色化。その後、基部を敲面とした敲石として使用。	敲石	砂岩
11	50	(7.6)	(5.0)	(2.7)	121.4	形状は楕円形か。肉厚。下部を大きく欠損。裏面に自然面を大きく残す。表裏とも側縁部に細かい剥離が施された後、稜が潰されている。	打製石斧	頁岩
12	100	8.3	4.2	1.2	96.6	扁平な自然縁を特に丁寧に研磨し刃部整形する。側縁部は平坦面ができるように研磨。上部は装着により一部剥離。刃部は使用により剥離している。	磨製石斧	頁岩
13	100	11.5	8	6.7	537.3	断面が三角形を呈する。側縁全周に剥離や敲打を施すことで握りを形成。底面は平坦面形成のための調整が施される。被熱により若干赤色化。	スタンプ型 石器	石英斑岩
14	100	10.4	6.3	5.5	425.9	断面が三角形を呈する。底面は平坦面形成のための調整が施される。風化著しい。	スタンプ型 石器	閃緑岩
15	100	11.3	7.4	5	551.2	断面がやや三角形を呈する。底面は平坦面形成のための調整が施される。	スタンプ型 石器	閃緑岩
16	100	11.2	6.5	5.4	537.2	断面が三角形を呈する。底面は平坦面形成のための調整が施される。風化著しい。	スタンプ型 石器	閃緑岩
17	100	8.7	7.3	5.1	434.6	断面が肉厚の楕円形を呈する。右側面下部に敲打痕あり。底面は打割後、使用による剥離痕がみられる。	スタンプ型 石器	閃緑岩
18	100	12.1	10.1	4.4	726.3	断面が楕円形を呈する。右側面に剥離。敲打痕あり。底面は打割。	スタンプ型 石器	閃緑岩
19	100	11	7.9	4.1	449.3	断面が楕円形を呈する。もともと括れを持つ自然石で側縁部に剥離や敲打を施すことで握りを形成。底面は使用により細かな剥離が見られ、一部に使用による磨耗痕もみられる。	スタンプ型 石器	砂岩
20	100	12.3	7.7	5.5	736.1	断面が三角形を呈する。自然面に括れあり。底面は使用による細かい剥離痕がみられる。	スタンプ型 石器	砂岩
21	70	(10.7)	(12.2)	2.6	529.2	扁平な縁で窪みはみられない。被熱により赤色化。風化著しい。一部欠損。	石皿	閃緑岩

第4表 出土石器観察表(1)

( ) 内数値は現存値

No.	遺存状況 (%)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	説 明	器 種	石 材
22	50	(10.5)	(7.5)	(2.9)	290.6	表裏とも窪みをもつ。表面に二つの窪み、大きく欠損後被熱により赤色化。	石皿	砂岩
23	60	(11.2)	(11.7)	(3.0)	447.9	表面に浅い窪みを持つ。被熱により赤色化。裏面は被熱により火焼ねし、あばた状を呈する。	石皿	安山岩
24	不明	(8.4)	(12.1)	(4.1)	458.4	表面に多くの窪みをもつ。被熱により赤色化。それにともない大きく欠損。	石皿	安山岩
25	100	7.4	8.2	5	376.8	底部から右側面部にかけて敲打がみられる。荒い砂岩で風化著しい。	敲石	砂岩
26	100	9.8	8.4	5.1	554.3	肉厚。刃部は表裏面よりの剥離により成形。表裏面とも自然面を残す。被熱により赤色化。風化著しい。	石器	ホルンフェルス
27	100	5	5.2	2.2	199.4	打面を自然面とする剥片を使用。裏面左から下部にかけて細かい剥離が施され刃部を形成している。	スクレイパー	黒色頁岩
28	100	3.4	3.4	1.1	8.1	裏面は主要剥離面。右側縁中央から下部にかけて細かい剥離が施され刃部を構成する。	スクレイパー	チャート
29	100	5.9	6.9	3.7	185.5	小型の割に肉厚。刃部は片刃。裏面は自然面。被熱により赤色化。風化著しい。	石器	黒色頁岩
30	100	26.1	22.8	6.3	4988.5	表面に大きな浅い窪みを持つ。窪み部は滑らか。裏面は広い範囲にわたり平滑。磨り痕が認められる。	石皿	砂岩
31	50	(41.1)	(20.9)	3.7	3437	表面中央部に大きな窪みをもつが、表面左半分欠損時に窪み底部が剥落する。節理面で自然面が欠落している部分あり。	石皿	緑泥片岩
32	100	34.5	16.6	8.1	7064.8	表面下部に二つの浅い窪みをもつ。窪み部は滑らか。裏面はやや斜め。	石皿	砂岩

第4表 出土石器観察表(2)

#### IV まとめ

今回発掘調査を実施した宮林遺跡は、国道140号線バイパスの建設に伴う発掘調査（宮井他1985）により、縄文時代草創期の遺構や該期の土器が出土したことで有名である。しかしながら、第2次調査から本次調査に至る3回にわたる発掘調査では、主として古墳時代前期の良好な集落跡を調査することができた。

宮林遺跡の占地する柳挽台地は荒川によって開析され、いくつもの河岸段丘が形成されている。この河岸段丘崖の斜面下部からは現在でも湧水が認められ、これら湧水の利用による集落の維持形成が行われていたことが想像される。

ここでは、現在まで確認されている宮林遺跡における古墳時代前期の住居跡について若干まとめておきたい。

現在までに確認されている古墳時代前期の住居跡の総数は11軒である。いずれも段丘上部の標高75.5m付近の最高位の地点を中心にして段丘崖に沿うように南西～北東方向にかけて占地していることが判明している。検出された住居跡の規模については第6表のとおりである。

古墳時代の集落の範囲の広がりについては、現在までの発掘調査の成果で全てを把握すること

は難しいが、その分布はおおよそ以下のような範囲に収まるものと考えられる。国道140号線バイパスの発掘調査により、鬼高期の住居跡が段丘上より1軒検出されているが、今回の発掘調査区からの住居跡の連続性は認められず、時期的にもやや後続する時期のものである。また、今回調査区の東側に隣接する土地について、共同住宅の建設に伴う確認調査を実施した際に、駐車場部分において該期の住居跡が確認されており（保存対応）、ここまでは集落が連続していることが確認できた。

その一方、今回の調査区の西側に隣接する畑地については、過去の遺跡分布調査や耕作の際に多量の土師器片の出土が確認されており、住居跡存在の可能性が非常に高い。調査区の北西に位置する花園第二保育園の駐車場造成工事に伴う確認調査の際に住居跡は確認されておらず、集落の西側の限界はこれより東になることが予想される。

現在までのところ宮林遺跡の古墳時代前期集落の中心域については判然としないが、現在の調査区よりも西側に拡大することはほぼ間違いないであろう。

住居番号	規模 ※ ( ) は推定	平面プラン	炬の有無	壁高(cm)	主軸方位	備 考
1号住居跡	(2.7～) × (1.9～)	方形	○	40	N-3° -E	
2号住居跡	5.50×4.40	方形		40	N-65° -E	
3号住居跡	4.75×4.30	方形		30	N-45° -E	
4号住居跡	4.30×4.00	方形	○	30	N-60° -E	
5号住居跡	(6.0～) × (3.8～)	方形		30	N-30° -W	
6号住居跡	5.6×4.7	方形	○	20	N-15° -W	
7号住居跡	5.15×5.15	方形		20	N-35° -W	
8号住居跡	(3.7～) × (2.85～)	方形	○	23	N-33° -W	
9号住居跡	4.6×3.9	方形	○	20	N-50° -E	
10号住居跡	6.0×6.0	方形	○	25	N-15° -W	
11号住居跡	3.7×3.7	方形		20	N-13° -W	

第6表 住居跡規模一覧

報告書抄録

ふりがな	みやびやしーせき-だい4じちようき-							
書名	宮林遺跡-第4次調査-							
副書名								
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第102集							
編著者名	森下昌市郎							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 深谷市本住町17番地3 In048(572)9581							
発行日	平成20年3月28日							
しりぞくしやう 所収遺跡	しやうじから 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
みやびやしーせき 宮林遺跡	みやびやしーせき 深谷市永田字宮林 479番地1~3	11218	00-008	35° 8' 22"	139° 15' 9"	平成19年3月19日から 平成19年5月11日まで	1630㎡	工場 建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	縄文～ 古墳時代	竪穴住居跡2軒 焼土跡2基 土坑3基 集石2基		縄文土器 石器 土師器		当遺跡は、当地域における古墳時代 前期の中心的な集落跡である。 また、出土している古式土師器は基 準資料ということができる。	

写 真 图 版





10号住居跡遺物検出状況（東から）



10号住居跡遺物検出状況（南から）

図版 2



10号住居跡床面出土状況その1



10号住居跡床面出土状況その2



10号住居跡床面出土状況その3



10号住居跡床面出土状況その4



10号住居跡床面出土状況その5



10号住居跡床面出土状況その6



11号住居跡確認状況



11号住居跡完掘状況

## 図版 4



調査地点を南東から望む



調査区近景 (南東から)



調査区近景 (北から)



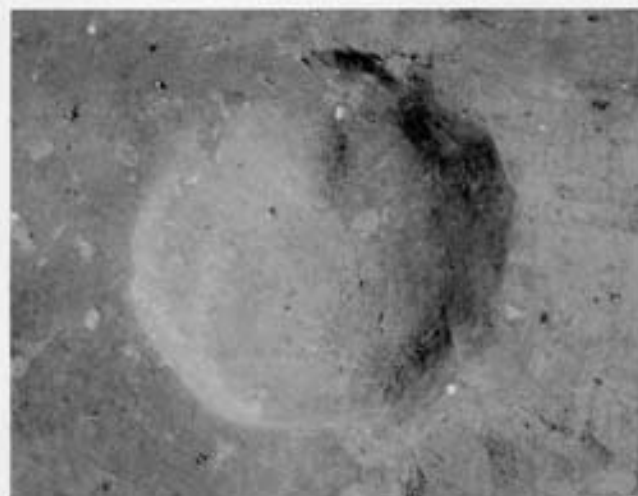
E-10区南北土層断面状況



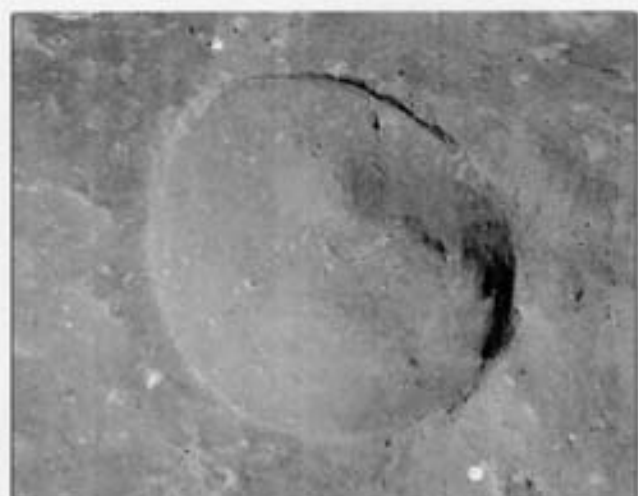
補足トレンチ調査実施状況



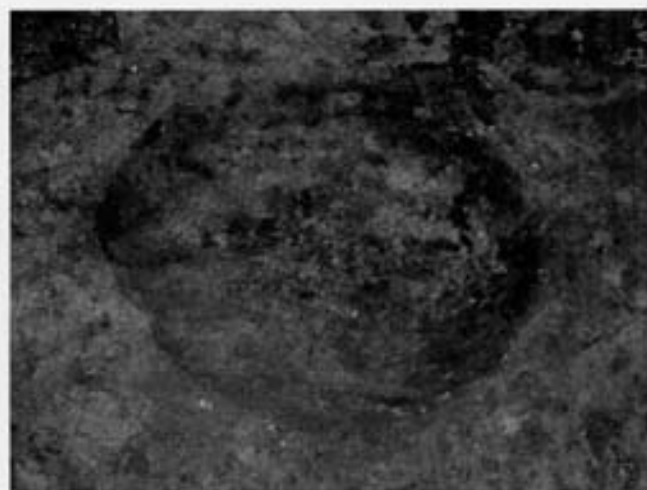
調査区埋め戻し状況



第1号土坑完掘状況



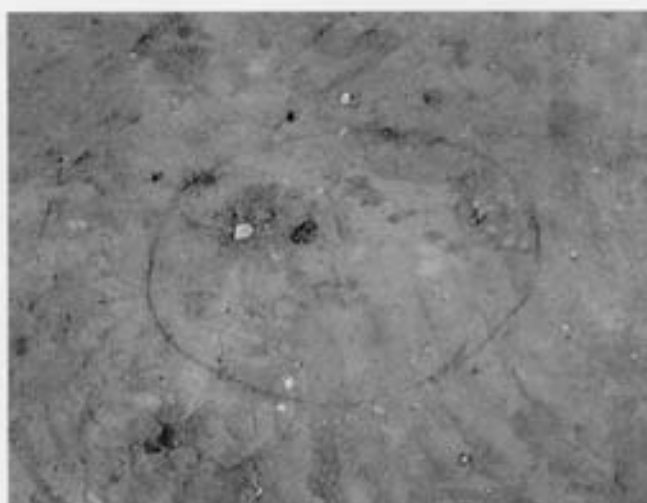
第2号土坑完掘状況



第3号土坑完掘状況



遺構確認状況



第1号焼土跡確認状況



第2号焼土跡確認状況



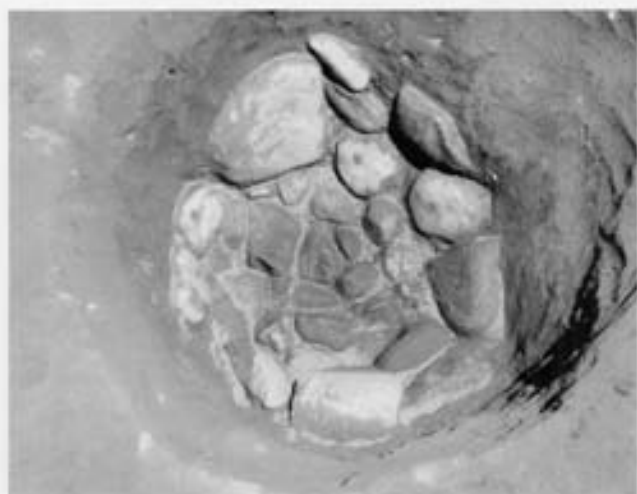
图版 6



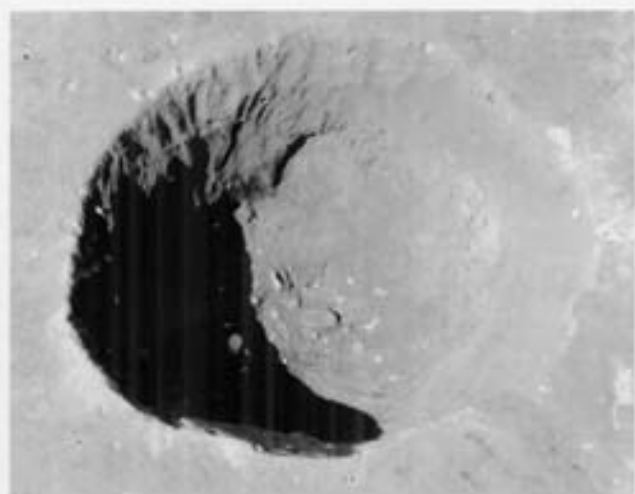
第1号集石土坑確認状況



第1号集石土坑断面状況



第1号集石土坑底面状況



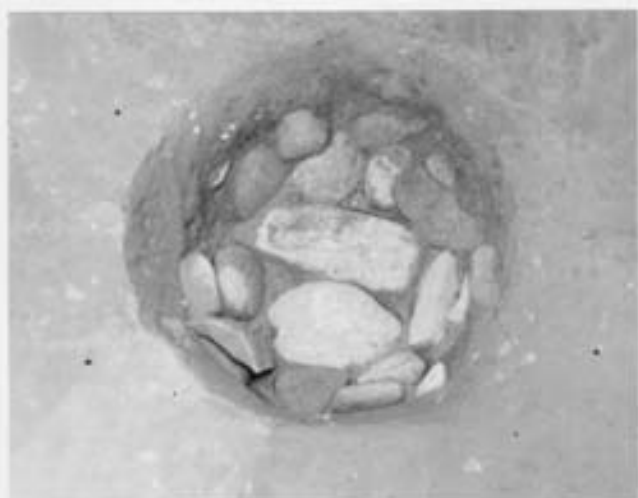
第1号集石土坑完掘状況



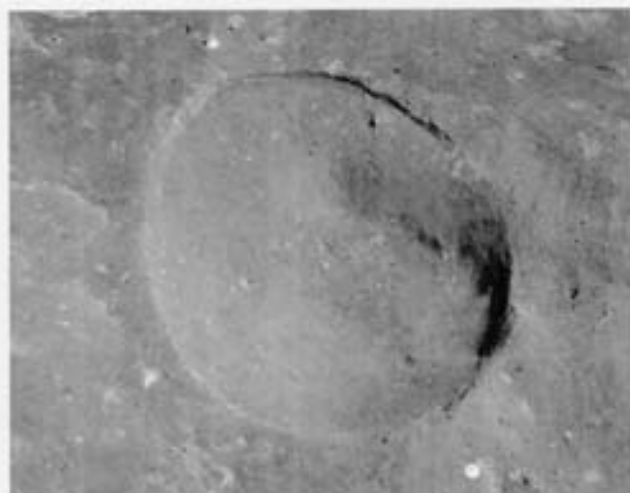
第2号集石土坑確認状況



第2号集石土坑断面状況



第2号集石土坑底面状況

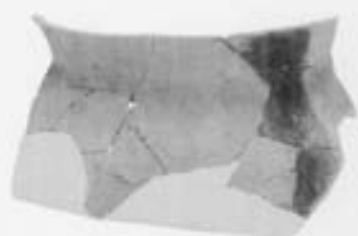
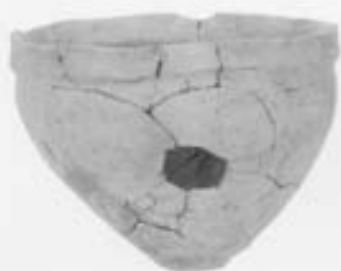


第2号集石土坑完掘状況

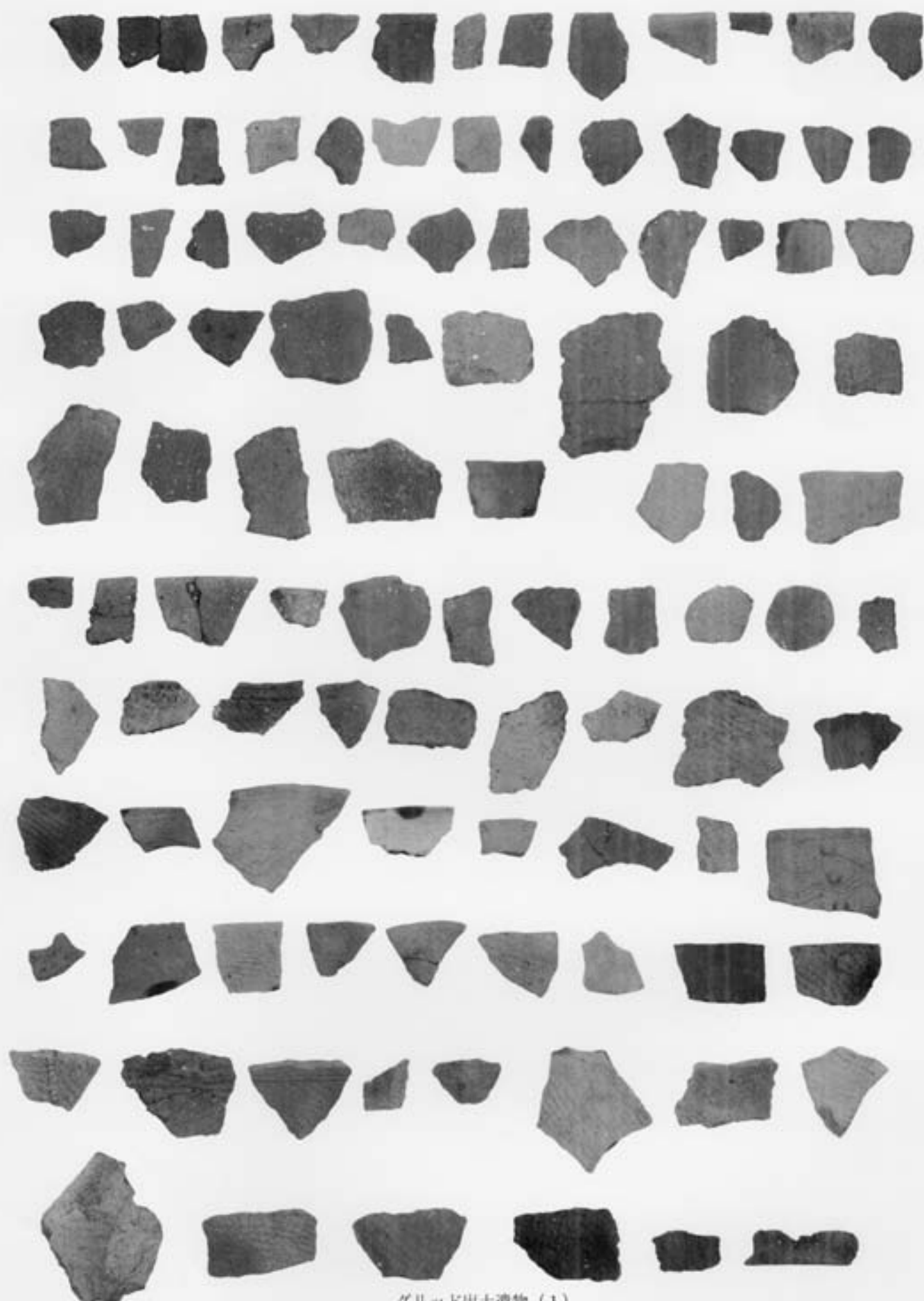


集石土坑調査状況

图版 8



第10号住居跡出土遺物



グリッド出土遺物 (1)

図版10



グリッド出土遺物(2)



グリッド出土遺物(3)



宮林遺跡-第4次調査-

2008年3月28日

編集発行 深谷市教育委員会  
埼玉県深谷市本住町17-3

印刷 大屋印刷株式会社